

第一〇部
索引

あ

- 荒田八幡 〇五一八
- 荒田庄の四至 〇一二一
- 荒田庄 〇一二九
- 荒田八幡浜下り 〇五七八
- 荒田庄弁済使収納使 〇一四三
- 新しい火山活動 〇八
- 新しい住居表示制度の実施 〇七四一
- 安楽寺領 〇一二一・一二九
- 阿多君 〇一〇三
- 阿多始良火山の活動 〇五
- 阿太肥人床特売 〇一〇〇
- 阿高式 〇四九
- 阿蘇惟時 〇一九八
- アンジロー 〇三〇一
- アルメイダ第一回鹿児島布教 〇三〇五
- アルメイダ第二回鹿児島布教 〇三〇五
- アルメイダ第三回鹿児島布教 〇三〇五
- アルタイ系遊牧民神話と天孫降臨神話 〇九一

- 厚智山座主職 〇一五三
- 厚智山花尾権現社鏡銘 〇一五
- 一
- 厚智座主兼収納使 〇二六一
- 安養院 〇一四五・五二一
- 安保闘争 〇七〇六
- 朝山梵灯庵の入薩 〇二五五
- 秋 〇三六
- 秋月等観 〇二五五
- 赤崎貞幹 〇四五〇
- 畦掛銀 〇三七三
- 闇奇学派 〇四五二
- 噯・与頭・横目廃止 〇六二四
- 旭相互銀行争議 〇七一
- 字・地 〇七〇三
- 有馬系図 〇一三七
- い・ゐ
- 伊地知季安 〇四五三・四五五
- ・四五七
- 伊呂波丸 〇四六七
- 伊呂波丸・昇平丸 〇三九〇
- 伊敷領主 〇一四二
- 伊爾色神 〇一一四

- 伊集院久氏 〇一九九
- 伊集院忠国 〇一七六
- 伊集院忠国の地頭在職 〇一九
- 九
- 伊集院頼久 〇二四八
- 伊集院頼久の所領 〇二一九
- 伊集院頼久を清敷に置く 〇二一四
- 伊集院頼久東福寺城を攻略す 〇二二〇
- 伊集院頼久の帰順 〇二二一
- 伊集院忠棟事件おこる 〇二八
- 一
- 伊集院氏の没落 〇二二七
- 伊集院氏と坊津 〇二五〇
- 伊東祐安山東を占領す 〇二一九
- 九
- 伊東祐立と盟約 〇二二一
- 伊東祐立と和す 〇二二四
- 伊東義祐豊後に走る 〇二七四
- 伊作宗久 〇一五六
- 伊作勝久に所領を宛行う 〇二二
- 二一
- 伊作氏・阿多氏と争う 〇二二

- 一
- 伊作氏の分裂 〇二二三
- 伊作を没収す 〇二二三
- 一ノ宮住居址 〇五九・七一
- 一ノ宮式 〇六三
- 一ノ宮Ⅱ式 〇六四・七六
- 一色範氏 〇一八四
- 一家と国方 〇二四一
- 一向宗禁制の理由 〇五〇五
- 一帯当たりの人員 〇七九六
- 一乘院主実信 〇二四
- 一乘院 〇二五三
- 一郷一郡制 〇一一〇
- 和泉実忠 〇一五六・一九八
- 和泉崎 〇二二二
- 石郷遺跡 〇三九・五八
- 石坂式 〇四五
- 石屋・通幻に曹洞禪を学ぶ 〇二五二
- 石田三成の掟 〇四一七
- 医学 〇四六〇・六四五
- 医学院 〇四六三
- 医師への諭告文 〇六四五
- 医師 〇六二六

医薬行政 〇六三〇

医学部附属看護学校 〇九六八

医学部附属保健婦学校と

同附属助産婦学校 〇九六九

医学科関係 〇九七五

硫黄 〇二八八

硫黄の輸入制限 〇二四五

硫黄相場の下落 〇二四五

硫黄は將軍の専売品 〇二四五

硫黄・蘇木・胡椒 〇二四九

硫黄と蘇木 〇二五〇

岩永三五郎 〇五〇一

岩倉の帰国と遣使変更 〇六〇〇

岩倉勅使来鹿 〇六二五

岩村県令 〇六六〇

岩剣城攻撃にあたり初めて鉄砲

を用う 〇二六八

芋判 〇六九一

板垣洋行 〇六〇八

板垣遭難 〇六〇八

磯仙巖園 〇四九二

磯街道 〇七〇五

入来院重長・久豊に援を請う

〇二二二

入来院氏久豊に帰服す 〇二二二

二

亥の日 〇五六一・五六五

石屋・中巖義堂と交る 〇二二五

二

石清水の光清 〇二二三

稻荷市 〇五六七

稻荷神社 〇三一一・五一七

稻荷祭と流鏑馬 〇五七四

家久 〇三三三

家久の鶴丸城移住の時期は不明

〇三一九

家作り 〇五三六

家葺 〇五三七

市来式 〇五一

市来忠家 〇二二五

市来氏の滅亡 〇二二八

市来家親 〇二四八

市来氏と市来 〇二五〇

市場 〇三一七

出で立ちの式 〇五五四

出水郷士 〇六八四

指宿式 〇四九

指宿線 〇五六六

夷人雑類 〇九九

異人館 〇五〇一

院司業平 〇一四八

意見書提出 〇二三九

位置 〇一

老岐島合戦 〇一六四

院政権の地方攻勢 〇二二〇

今給黎久俊を降して知覧を収む

〇二二二

今川了俊 〇一九四

泉庵 〇二五四

移居記 〇四七二

衣服の規制 〇五三八

隠居 〇五五三

イロリ 〇五三八

インドネシア系神話と日向神話

〇九二

イギリス外交官の鹿児島訪問

〇四〇〇

イギリス皇族コンノート親王来

遊 〇八一

う

上山領主 〇一四三

上山氏 〇一九四

上原蘭 〇一五七

上原三郎久基 〇一六二

上原氏 〇一五九・一九四

上原三郎基員・中俣弥四郎入道

道証 〇一六〇

上野徳二 〇六八六

宇佐八幡宮の別宮 〇一一三

宇佐弥勒寺の末宮 〇一一三

梅北国兼の叛 〇二七七

内城 〇二五九

内城は急構えの居館 〇三二七

内菌と外菌 〇二二六

ウイリス 〇六四五

雲行丸 〇三九〇

孟蘭盆会禁止 〇六三九

浮世百姓の家 〇五三六

浮免 〇四三一

浮免の利用形態 〇四三三

牛屎院郡司 〇一九〇

牛掛合戦 〇一八一

牛 〇四一八・四二二

馬匹数 〇四四六
 馬追 〇三六一
 馬 〇四一八・四二二
 厩 〇四四五
 雨水路の整備 〇七二八
 埋立工事 〇七五六
 運動会と陸上競技 〇一〇一九

え・ゑ

延喜式の鹿島 〇一一四
 栄秀 〇一六三
 栄慶 〇一六三
 永享四年の遣明船 〇二四五
 永享六年の遣明船 〇二四五
 永安橋 〇五〇一
 江田邸 〇五四七
 江田邸の間取 〇五四八
 江田基 〇六八二
 江戸時代の消防 〇二七七
 江戸時代の鹿児島は大都市 〇三二九
 縁与 〇五〇九
 エビス踊 〇五八六
 英語学校 〇六五三

英語進学関係 〇九七五
 海老原穆 〇六九四
 演武館 〇四八一
 演劇 〇一〇八一
 映画 〇一〇八六
 N・H・K 〇一一三
 M・B・C 〇一一六
 営業状態 〇五七八
 沿岸漁業の振興策 〇四六二
 沿岸漁業の将来 〇四六四

お・を

大隅国 〇一〇三
 大隅直 〇一〇三
 大隅古墳群 〇一〇三
 大隅の中心国分平野に移る 〇一〇三
 大隅の建国 〇一〇四
 大隅守時統当世 〇一一六
 大隅国図田帳 〇一三〇
 大隅西部の反 〇二六八
 大伴旅人の隼人討伐 〇一〇五
 大蔵幸光(満) 〇一五一
 大友氏討伐 〇二七五

大河平隆棟 〇四五四
 大久保の反対論 〇六〇二
 大久保への憎 〇六九四
 大島紬 〇三五五・三六三
 大山参事 〇六二八
 大山綱良 〇六七二
 大番役 〇一七七
 大晦日 〇五六八
 大阪会議 〇六〇六
 大石兵六夢物語 〇四七〇
 大船一五隻建造計画 〇四六八
 大型空港の設置問題 〇七五六
 小田原征伐 〇二七六
 小野石切 〇四三八
 小浜半之丞 〇六八五
 応仁二年の遣明船 〇二四六
 応仁の乱により琉球船の来航絶
 ゆ 〇二四六
 応仁の乱後の本土商人の琉球進
 出 〇二九二
 御礼銀 〇三七六
 御馬追 〇四四五
 御使狐 〇五一八
 奥州出軍 〇一三一

か

奥州家の勢力範囲 〇二一九
 おとな 〇二四一
 お由羅騒動 〇三八五
 お座 〇五一一
 お盆 〇五六一
 オランダ人士官の湾内防備策 〇三九二
 オタケマイリ 〇五六四
 沖繩第一百五十二国立銀行鹿児島支店 〇七六三
 鬼丸五助 〇六八三
 岡本勝知 〇六八八
 押絵 〇五九三
 王政復古論告 〇五九六
 織物業 〇三七〇
 温泉 〇四七二
 開山石屋真梁 〇二一八
 開成所 〇四八二
 会社 〇三〇六・三二五
 海軍の創設 〇三九一
 海上警備隊 〇三〇二
 海上保安庁 〇三〇二

- 海上犯罪の検挙と海難救助 ○
 三〇四
 海外留学生の派遣 ○三九八
 海外市場の開拓 ○三五三
 改元明治 ○五九七
 改正中学校令と改正施行規則
 ○八五二
 外人教師 ○六五一
 街路事業 ○七三二
 唐芋出世来由記 ○四七三
 柏田盛文 ○七四二
 樺山孝久 ○二二五
 樺山資綱 ○六七七
 甲斐半蔵 ○六七八
 家法和訓 ○二五五
 家政科関係 ○九七五
 鴨池動物園 ○九八九・一〇一
 四
 鴨池動物園の鹿児島市移管 ○
 一〇〇二
 懐良親王 ○一八一
 困米 ○五四一
 被りもの ○五四〇
 火災被害 ○六六一
-
- 火災の頻発 ○三六八
 火山活動 ○四
 火葬埋葬墓 ○七八
 加士伎県 ○一〇三
 加士伎県主 ○一〇三
 加治木氏系図 ○一四八
 加治木郷 ○一四八
 加治木八郎親平 ○一四八
 加治木久平を阿多人移す ○二
 三四
 加治木・帖佐開田 ○七四六
 紙籬 ○五九三
 紙製品 ○三六九
 菓子 ○三六六
 片倉製糸紡績株式会社 ○三六
 五
 神祭 ○五四三・五六一
 荻田狼藉 ○一九四
 仮屋 ○二四一
 袴着初め ○五五六
 甕形土器 ○七八
 甕形土器A ○七〇
 甕形土器B ○七〇
 為替率の決定 ○六七六
-
- 勝久鹿児島に帰る ○二六二
 勝久川上昌久を谷山に誅す ○
 二六三
 勝久鹿児島を出走す ○二六三
 春日町遺跡 ○四二
 春日式 ○四七
 春日神社 ○五一八
 蒲生宣清を蒲生から給黎へ移す
 ○二二八
 蒲生宣清を蒲生へ帰す ○二三
 四
 蒲生範清降伏す ○二六九
 蒲原村 ○一九九
 各種工業の生産高 ○三七六
 各種学校規程の制定 ○九七四
 各種学校の概念 ○九七四
 課外運動としての欧米系スポー
 ツ ○一〇二二
 課外運動としての伝統的体育
 ○一〇二三
 課外運動としてのボート・レー
 ス ○一〇二六
 鐘が崎式 ○五一
 水主役負担一般的 ○三七六
-
- 川の流れ方 ○一二
 川辺の開城 ○二二二
 川・橋・濠 ○七〇四
 川田左清 ○一六〇
 川上昌久・末弘忠重を殺す ○
 二六三
 川島学園争議 ○六九三
 河谷の性質 ○一三
 河内王朝による王統の交代 ○
 九七
 河内王朝の熊襲隼人平定 ○九
 七
-
- 河辺氏との関係 ○一三八
 河川水路事業 ○七三六
 華族令 ○六一〇
 華道 ○一〇八六
 滑走路の拡張 ○七五五
 活性汚泥法 ○七二六
 カルデラの形成 ○七
 貸切バス(戦前) ○四七九
 ガラス ○三六一・三六八
 カクイワタ争議 ○六九八
 カセダウチ ○五六六
 学制 ○六一三・六五二

- 学務課 〇六五二
- 学規七条 〇四七七
- 学寮日帳 〇四八〇
- 学校 〇七〇三・七〇七
- 学校閉鎖 〇六五三
- 学校令 〇八〇六
- 学校施設・教科書への制約 〇九二六
- 学校給食の制度と施設 〇一〇四四
- 学校教育の指導精神 〇八〇六
- 学校教育行政の課題 〇八七一
- 学校教育用語としての体操体育の成立 〇一〇一六
- 学校体操の系統 〇一〇一六
- 学校体操教授要目の制定 〇一〇一八
- 学校体操教授要目の再改正 〇一〇三四
- 学舎 〇七一〇
- 学舎の教育理想 〇九八一
- 学舎の教育内容と教育方法 〇九八一
- 学舎の前身としての郷中教育の特質 〇九七八
- 学舎の成立 〇九七九
- 学舎の規模と組織 〇九八三
- 学舎の発展 〇九九三
- 学舎の体育 〇一〇二七
- 学術用器 〇三六九
- 監査委員 〇五二
- 監査権 〇二三九
- 監獄署 〇七〇七
- かん詰 〇三五九・三六九
- 上町台地の地形 〇一九
- 上町台地の発展 〇一九
- 上町の歴史的意義 〇二〇
- 上別府村 〇一二七
- 上総法橋栄尊 〇一五〇
- 上井甚七 〇六七九
- 上井保 〇六八二
- 貫高 〇二四一
- 寛永内検 〇四一九
- 管轄区域 〇二九三
- 看護婦 〇六二七
- 看護婦の養成 〇六二九
- 環境衛生 〇六四七
- 簡易水道施設 〇七二五
- 漢詩 〇一〇六一
- 官人富豪層の土地兼併 〇一一七
- 官位褫奪 〇六六〇
- 官軍墓地 〇六九〇
- 官営工場払下げ 〇六一五
- 官庁 〇七〇三
- 官公庁関係の行政整理 〇六八二
- 観応の擾乱 〇一八六
- 観光行政の開始 〇四八五
- 観光案内所 〇四八六
- 観光基本法 〇四九〇
- 観光の広域化 〇四九三
- 観光バス 〇五八一
- 勸業第一試験場 〇七六四
- 勸業第二試験場 〇七六四
- 鹿児島の発展 〇一
- 鹿児島の位置 〇二五
- 鹿児島は桜島の古名説 〇一一二
- 鹿児島信爾村 〇一一二
- 鹿児島神 〇一一四
- 鹿児島主 〇一三三
- 鹿児島郡武村 〇一九三・二一五
- 鹿児島郡の境域 〇一一三
- 鹿児島郡の三郷 〇一一四
- 鹿児島郡司有平 〇一三〇
- 鹿児島郡司弁弁濟使職 〇一三三
- 鹿児島郡司職内十分一 〇一四一
- 鹿児島郡司貞澄代内田右衛門太郎実澄 〇一六二
- 鹿児島郡地頭職 〇二〇〇
- 鹿児島郡関係の島津氏による土地処分状況 〇二〇一
- 鹿児島郡長谷場村門前坂本村池上谷山郡宇宿村の田畠を福昌寺に寄進す 〇二一八
- 鹿児島西方郡司 〇一四一
- 鹿児島中務丞康兼と矢上三郎盛澄の争論 〇一三五
- 鹿児島中務次郎康邦と矢上左衛門尉盛澄後家の争論 〇一三六
- 鹿児島の近郷 〇二二二

- 鹿児島の郷村 ○二三六
- 鹿児島及びその周辺の地 ○二七九
- 鹿児島の市街 ○二六六
- 鹿児島の唐人町 ○二九一
- 鹿児島の町と村 ○七〇二
- 鹿児島の人口は六〇七万人 ○三二五
- 鹿児島の人口は藩内の一割弱 ○三三〇
- 鹿児島神社 ○一二二
- 鹿児島神社浜下り ○五七九
- 鹿児島におけるザビエル ○三〇二
- 鹿児島の寺院 ○三〇九
- 鹿児島紡績所 ○三九九
- 鹿児島郡役所 ○七〇二
- 鹿児島地方軍政部 ○七三三
- 鹿児島税関監視所 ○三〇五
- 鹿児島開発事業団 ○二二八・七四八
- 鹿児島東郵便局 ○五九四
- 鹿児島中央郵便局 ○五九四
- 鹿児島警察署 ○二九二
- 鹿児島警察署武道館の整備 ○一〇四七
- 鹿児島商業会議所 ○三一四・三三二
- 鹿児島商工会議所 ○三三二・三三三
- 鹿児島商法会議所 ○三三二
- 鹿児島授産場 ○七五一
- 鹿児島競馬会社 ○七五一
- 鹿児島瓦斯株式会社設立 ○三八九
- 鹿児島電気株式会社設立 ○三八五
- 鹿児島電気・熊本電気と合併 ○三八六
- 鹿児島電気株式会社兼営 ○三八九
- 鹿児島紡績株式会社 ○三六四
- 鹿児島電気軌道株式会社時代の電車 ○五五九
- 鹿児島本線開通 ○五六五
- 鹿児島交通株式会社 ○五七九
- 鹿児島飛行場 ○五八八
- 鹿児島飛行場の設置 ○七五五
- 鹿児島駅・西鹿児島駅の乗降人員 ○五八四
- 鹿児島港の整備 ○三八四
- 鹿児島・桜島地区観光総合開発構想 ○四九四
- 鹿児島港 ○七六六
- 鹿児島港上陸客 ○四七八
- 鹿児島港の貿易 ○五〇五
- 鹿児島港の貿易の変遷 ○五〇八
- 鹿児島港の整備 ○五八六
- 鹿児島南港 ○七五二
- 鹿児島新港 ○七五三
- 鹿児島海区漁業調整委員会委員選挙 ○二七五
- 鹿児島地方労働組合評議会 ○六八七
- 鹿児島銀行争議 ○六九二
- 鹿児島地区労働組合評議会 ○七〇三
- 鹿児島小太郎康弘 ○一三四
- 鹿児島出身の森有礼 ○八〇五
- 鹿児島人の出版 ○七三五
- 鹿児島文化財保護条例と専門委員会設置条例 ○一〇九四
- 鹿児島新聞 ○七二一・〇一一・〇三
- 鹿児島毎日新聞 ○一一〇五
- 鹿児島実業新聞 ○一一〇六
- 鹿児島朝日新聞と改称 ○一一〇七
- 鹿児島新報 ○一一一
- 鹿児島聾啞学院 ○八三八
- 鹿児島慈恵盲啞学校 ○八三八
- 鹿児島盲啞学校の県への移管 ○九一〇
- 鹿児島師範学校 ○六五三
- 鹿児島青年師範学校の実現 ○九一三
- 鹿児島師範学校の鹿屋移転と鹿児島復帰 ○九六三
- 鹿児島商業学校 ○八五六
- 鹿児島集成工学校の創設 ○九〇七
- 鹿児島鉄道学校の成立 ○八六三
- 鹿児島実業学校 ○八六三
- 鹿児島鉄道学校・鹿児島実業学

- 校の拡充整備 〇九〇六
 鹿児島高等女学校の設立 〇八
 六一
 鹿児島女子商業学校 〇九〇九
 鹿児島女子技芸学校 〇八三六
 鹿児島高等実践女学校の成立
 〇八六一
 鹿児島高等実践女学校と鹿児島
 女子実践商業学校 〇九〇八
 鹿児島純心高等女学校 〇九〇
 九
 鹿児島高等女学校と鹿児島高等
 家政女学校 〇九〇八
 鹿児島高等女学校専攻科 〇九
 二〇
 鹿児島高等中学造士館 〇八三
 九
 鹿児島高等農林学校 〇八四〇
 ・九一七
 鹿児島高等農林学校の発展 〇
 八六七
 鹿児島純心女子短期大学 〇九
 七二
 鹿児島女子短期大学 〇九七三
-
- 鹿児島短期大学 〇九七三
 鹿児島高等商業学校 〇九一九
 鹿児島経済大学の成立 〇九七
 二
 鹿児島大学の成立 〇九六五
 鹿児島大学の進展 〇九六五
 鹿児島大学の現状概要 〇九六
 七
 鹿児島造士会講習所 〇九八六
 鹿児島教育博物館 〇九八七
 鹿児島県立幼稚園 〇八一
 鹿児島県立農学校 〇八三四
 鹿児島県立工業学校 〇八六〇
 ・八九九
 鹿児島県立商船水産学校 〇八
 三五・八九八
 鹿児島県尋常中学校の成立と展
 開 〇八二六
 鹿児島県立第一中学校 〇八二
 八
 鹿児島県立鹿児島第二中学校
 〇八二八
 鹿児島県尋常師範学校 〇八二
 四
-
- 鹿児島県立第一高等女学校専攻
 科 〇八六八・九一八
 鹿児島県立第一高等女学校の具
 体例 〇一〇一八
 鹿児島県立第二高等女学校 〇
 八三一
 鹿児島県立工業専門学校の新設
 〇九一九
 鹿児島県立医学専門学校の新設
 〇九一九
 鹿児島県立大学の医・工・商学
 部の国立移管 〇九六六
-
- 鹿児島県立大学の成立 〇九七
 〇
 鹿児島県立短期大学の成立 〇
 九七〇
 鹿児島県警察学校 〇九七一
 鹿児島県消防学校 〇九七二
 鹿児島県立図書館の成立 〇九
 八七
 鹿児島県立図書館 〇九九九
 鹿児島県立博物館 〇一〇一二
 鹿児島県文化センター 〇一〇
 一五
 鹿児島県体育館の新設 〇一〇
 四七
 鹿児島県労働組合協議会 〇六
 七八
 鹿児島県労働組合連絡協議会
 〇六八四
 鹿児島県労働組合評議会 〇六
 九七
 鹿児島県労働組合総評議会 〇
 七〇三
 鹿児島県労働金庫 〇六九三
 鹿児島県中小企業労働組合連合
 会 〇六九八

鹿児島県春季賃上共闘会議 ○

六九六

鹿児島県授産会社 ○七四八

鹿児島県織物同業組合 ○三六

四

鹿児島県住宅供給公社 ○七四

七

鹿児島市内の幼稚園 ○八四四

・八七二

鹿児島市内の私立幼稚園 ○九

三三

鹿児島市内の保育所 ○九三六

鹿児島市における幼小の動的概

観 ○八四〇

鹿児島市内の小学校 ○八四五

鹿児島市立の小学校 ○九四一

鹿児島市移管の小学校 ○九四

二

鹿児島市立小学校の復興と新設

○九四三

鹿児島市立小学校の施設の変動

○九四四

鹿児島市立国民学校空襲の被害

状況 ○八八三

鹿児島市の児童 ○八七六

鹿児島市の人口増加と小学校新

設 ○八八〇

鹿児島市立小・中学校の特殊学

級の発展 ○九六二

鹿児島市内の私立小学校 ○九

四五

鹿児島市の小学校区 ○八七五

鹿児島市の三学区制 ○八〇八

鹿児島市立女子興業学校 ○八

五六・八九七

鹿児島市立鹿児島商業学校 ○

八九五

鹿児島市立の天保山商工学校・

市立工業学校 ○八九六

鹿児島市立の鹿児島高等実修女

学校・女子商業学校の創立

○八九八

鹿児島市立中学校の創設 ○八

八八

鹿児島市立中学校の成立 ○九

四八

鹿児島市立中学校の施設 ○九

四九

鹿児島市内の私立中学校 ○九

五〇

鹿児島市立高等女学校の新設

○八九二

鹿児島市立高等学校の変遷 ○

九五四

鹿児島市内の総合制高等学校実

施 ○九五二

鹿児島市内の公立六高等学校の

成立 ○九五三

鹿児島市内の県立高等学校の推

移 ○九五五

鹿児島市内の私立学校 ○九〇

五

鹿児島市立実業補習学校 ○九

〇〇

鹿児島市青年訓練所 ○九〇一

鹿児島市内の青年学校 ○九〇

三

鹿児島市内の青年学校の拡充

○九〇四

鹿児島市内における欧米系体育

の大会 ○一〇三〇

鹿児島市内における伝統的体育

○一〇三一

鹿児島市内の学校プールの整備

○一〇三八

鹿児島市立の学校体育館の整備

○一〇四一

鹿児島市立以外の学校体育館

○一〇四三

鹿児島市の社会体育施設 ○一

〇四五

鹿児島市の教育行政組織 ○八

〇七

鹿児島市長の小学校教員任命権

○八二二

鹿児島市役所の学事関係者 ○

八四三

鹿児島市の学校教育行政機構

○八七一

鹿児島市の旧制教育行政機構の

推移 ○九二一

鹿児島市教育委員会時代の展開

○九二一

鹿児島市内の社会教育活動とそ

○九二一

- の施設 〇九七八
- 鹿児島市および市教育委員会な
どの社会体育の推進 〇一〇
五〇
- 鹿児島市青年団の成立 〇九八
四
- 鹿児島市初代市長 〇四〇
- 鹿児島市青年団の発展 〇九九
五
- 鹿児島市の都市的發展 〇三九
二
- 鹿児島市内の貿易関係官庁〇五
〇七
- 鹿児島市内の貿易関係官庁の拡
充 〇五〇八
- 鹿児島市関係参議院議員選挙
〇二六七
- 鹿児島市原水爆禁止推進協議会
〇七〇一
- 鹿児島市住宅公社 〇七四六
- 鹿児島市進駐 〇七三
- 鹿児島市電気局時代の電車 〇
五六一
- 鹿児島市警察署 〇二九〇

- 鹿児島市観光協会 〇四八八
- 鹿児島市とナポリ市の姉妹同盟
〇四九〇
- 鹿児島市への観光客入込状況
〇四九一
- 鹿児島市地区一般中小企業労働
組合連合会 〇七〇三
- 鹿児島市立教育参考館 〇九八
八
- 鹿児島市公会堂 〇九九九
- 鹿児島市立歴史館 〇一〇〇〇
- 鹿児島市立美術館 〇一〇一三
- 鹿児島市中央公民館 〇一〇一
四
- 鹿児島市の指定文化財 〇一〇
九五
- 鹿児島市の文化財調査録 〇一
一〇二
- 鹿児島市の文化財 〇一〇二
- 鹿児島市社会課の成立 〇五九
九
- 鹿児島市内の社会事業施設 〇
五九八・六〇四
- 鹿児島市における社会事業施設
〇六〇〇
- 鹿児島市の社会福祉行政機構の
変遷 〇六一二
- 門と郷土 〇四三九
- 門の規模 〇四二八
- 門の出現 〇二三八
- 門の階層分化 〇四三五
- 門の初見 〇四三〇
- 門名寄帳の形式 〇四二八
- 門内部の人間関係 〇四二五
- 門割制の定義 〇四二二
- 門主と名頭 〇四二一
- 門屋敷菌の混在 〇二三九
- 門成立の事情 〇二三九
- 門成立の時期 〇二三八

- き
- 君が代 〇五〇〇・六三七
- 祇園神社 〇五一七
- 祇園祭 〇五七二
- 祇園祭由来 〇五七四
- 祇園祭の山台 〇五七三
- 祈願所 〇五〇四
- 切支丹は不吉なもの 〇三〇七

- キリシタン墓 〇六四二
- 木力暮遺跡 〇四三
- 木曾川 治水工事 〇三八〇
- 木崎原に伊東氏の軍を破る 〇
二七二
- 木藤武清 〇四五〇
- 木村時経 〇四九〇
- 肝衝氏 〇一〇三
- 肝属氏と富山氏 〇一二三
- 肝付兼重 〇一七八
- 肝付兼元・鹿屋忠兼の領地を侵
す 〇二一九
- 肝付兼久・高山で反す 〇二三
四
- 肝付兼演降伏す 〇二六六
- 肝付・襦寝氏の兵船・鹿児島を
侵す 〇二七一
- 肝付氏討伐 〇二七一
- 肝付氏降伏三州の統一成る 〇
二七二
- 近世編の起点は慶長七年 〇三
一六
- 近世初期の武家屋敷は山之口あ
たりまで 〇三五一

貴海島(硫黄島)平定 〇一三三
菊池氏久豊に使者を送る 〇二二
二四
気温の特色 〇二五
霧島講 〇五八一
着物の柄 〇五三九
金源珍 〇二四八
結分と被官 〇二〇三
給地高改正 〇三四六
救助米 〇六三五
気球創始 〇六九一
共立学舎沿革史 〇七二二
機械類 〇三六二
企業整備 〇三七二
行政区分 〇四四三
行幸 〇六三〇
行幸記録 〇六三〇
享保内検 〇四二〇
鳩巢学 〇四四九
記録奉行 〇四五六
記念物 〇一〇九三
旧記雑録 〇四五七
生糸 〇三五七
北麓遺跡 〇六一

北殿 〇二一五
魏志倭人伝の狗奴国 〇九五
牛馬 〇四〇五・四〇九
漁獲物 〇四五九
漁撈業者 〇四五九
漁船 〇四五九
漁業 〇七七六
錦江新誌 〇七二六
錦江湾と漁業 〇四六一
錦江湾パール 〇四六二
近在の範圍 〇四〇三
近在城下士 〇四〇九
近在の門 〇四二二
近世的門体制の確立 〇四二〇
近世の浮免 〇四三二
近代詩の変遷 〇一〇六〇
救恤所 〇六六一
救助小屋 〇六六四
救助活動 〇五九九・六〇二・
六〇八
金禄公債 〇六一五
金禄公債布達 〇六五九
金助まり 〇五九二
金融対策 〇三四七

銀行 〇三〇七
旧市庁舎時代 〇四三
旧制高等専門学校の問題 〇九
六三
郷土料理 〇四七五
郷土課 〇四八七
ギョウチヨ打 〇五九二
九州探題渋川満頼両島津氏を招
く 〇二一四
九州改進黨支部 〇七四五
九州配電株式会社鹿児島支店の
設置 〇三八七
九州電力株式会社鹿児島支店の
設置 〇三八八
九電労働支部 〇六九一
勤評反対闘争 〇六九五
教育方案 〇七一四
教育委員会 〇五三
教育費の推移 〇一二六
教育都市の基礎の確立 〇八四
二
教育二法反対闘争 〇六九二
教育二法国会通過 〇六九八
教育危機突破大会 〇七〇一
教職員の適格審査 〇九二四

義務教育六カ年制とその対策
〇八一七
義務教育費国庫負担問題 〇八
四三
義務教育の年限 〇八四四
義務制中学校の制度の創始 〇
九四六
義務制中学校制度の実施 〇九
四六
貴族院議員選挙 〇二六六
業種別の推移 〇三四五
橋梁の架設 〇七六一
玉山玄提・無関普門に学ぶ 〇
二五三
く
狗奴国熊襲説 〇九五
狗奴国系王朝による大和地方の
平定 〇九六
熊襲平定説話の原型 〇九七
熊果と曾果 〇一〇三
限人文石小麻呂 〇九九
肥人の習俗 〇九九
肥人部広麻呂 〇一〇〇

肥君と曾君 〇九八
 肥君・前君 〇一〇三
 久米次郎家願 〇一三二
 久木山 〇一六五
 桑原郡の創立 〇一一一
 桑原組 〇七四八
 公宮田制 〇一一六
 公方の所役 〇一九二
 公役 〇四三五
 黒川式 〇五四
 草野貝塚 〇四四
 草野式 〇五三
 国人 〇一七五
 国大将畠山直顕 〇一七八
 国衛領の壊滅 〇二二〇
 国一揆の結成 〇二一九
 車人形 〇五九二
 蔵入高と給地高 〇三三八
 蔵開 〇五五九
 郡司職と弁済使職の兼帯 〇一
 二二
 郡司職院司職郷司職 〇一四九
 郡司得分米 〇一五四
 郡司大蔵吉平 〇一五〇

郡座 〇三三三
 郡役所 〇七〇七
 軍忠状の提出 〇一八四
 軍事訓練の重視 〇三九一
 軍鎮 〇七〇七
 軍政部の閉鎖 〇七六
 組の役目 〇三五九
 組を通ずる藩士の統制 〇三五九
 組合運動の取り締まりと弾圧 〇六六七
 空襲 〇七七六
 空襲による被害 〇七七九
 計量行政 〇三四七
 け
 計画街路及び土地区画整理区域の決定 〇七三一
 桂樹院 〇二五四
 桂庵玄樹 〇二五四
 桂園派歌人 〇四七五
 敬神説略 〇六四〇
 慶長内検 〇四一八
 慶賀・穢多 〇四一二

警察 〇六三二
 警察制度 〇二八七
 警察の組織 〇二八八
 警察官の階級 〇二八八
 警察制度の改革 〇二八九
 警察官定数 〇二九三
 警職法改正反対闘争 〇六九五
 劇場 〇三一・四七二
 魔城少年団の設立 〇九八五
 魔城少年団の發展 〇九九五
 下人 〇四三五
 下水道事業 〇二二・六五五
 下水道敷設計画 〇七二六
 結婚式 〇五五二
 結核 〇六四〇
 月船寺 〇五二六
 祁答院氏・北原氏・入来院氏・東郷氏・吉田氏・菱刈氏・久逸に党す 〇二二二
 關所 〇一八五
 原始日本語の成立 〇九三
 建久八年薩摩国御家人交名 〇一三二
 建築材 〇三六二

決定権 〇二三八
 玄昌風 〇四九九
 憲法準備 〇六一〇
 檢校・沙汰人 〇二二四
 檢島 〇二三七
 檢地掟五カ条 〇四一六
 現在の鹿児島市市域 〇一二七
 現在の行政機構 〇五九
 現在の歌壇 〇一〇五六
 現実的な所領要求 〇一八五
 現行の会議規則 〇二四七
 県立小学校 〇八四七
 県立商船水産学校 〇八五九
 県立第一・第二高等女学校 〇八五五
 九〇
 県立一高女と県立二高女 〇八
 県立一高女 〇八九一
 県立第一・第二中学校の生徒定員増 〇八五三
 県立第一鹿児島中学校の薬師町移転 〇八五一
 県立一中と県立二中 〇八八五
 県立医大住居址 〇六〇・七三

県立医学校 ○六五〇
 県立鹿児島病院（鹿児島大学医学部附属病院） ○六三一
 県的主要岩石 ○八
 県名鹿児島 ○六二八
 県名 ○六二九
 県庁人事 ○七〇二
 県営織物授産場 ○七五六
 県教育委員会委員選挙 ○二七三
 県立鹿児島聾学校と県立鹿児島盲学校 ○九六〇
 県立養護学校の創設 ○九六一
 県立図書館 ○一〇一一
 県史跡名勝天然記念物保存顕彰規程 ○一〇九四

二
 講 ○五一一
 戸口を調査して吏を置く ○一〇六
 戸数・人口 ○七〇四
 戸長役場 ○七〇七
 高野山 ○一一二七

高等小学校 ○八一四
 高等女学校教育制度 ○八二九
 高等中学校の制度 ○八三八
 高等学校令 ○八三九
 高等教育機関の動的概観 ○八四二
 高等女学校令・同施行規則の改正 ○八五四
 高等女学校の進展 ○八五四
 高等女学校の専攻科・高等科の新制度 ○八六七
 高等女学校の教育制度の変遷 ○八九二
 高等女学校の学校工場化 ○八九四
 高等教育機関の増加 ○八七〇
 高度成長下の農業 ○四四四
 高陽院藤原泰子 ○一二四
 国立の幼稚園 ○八七四・九三二
 国立の小学校 ○九四一
 国立の附属国民学校 ○八八五
 国立の中学校 ○九四七
 国立の特殊学級の発展 ○九六

一
 国立鹿児島病院附属高等看護学院 ○九六九
 国立鹿児島病院 ○六三七
 国立銀行条例 ○六一五
 国民学校の教科 ○八八二
 国民学校の高等科増設 ○八八三
 国民義勇隊 ○六六
 国民健康保健特別会計 ○二二二
 国民精神総動員運動 ○九九八
 国学館 ○四八一
 国庫支出金の内容 ○一九〇
 国内市場の開拓 ○三五二
 国家警察予備隊 ○三〇二
 国家社会主義 ○六〇九
 国会開設詔勅 ○六〇六
 国会期成同盟 ○六〇六
 国鉄バス ○五八〇
 国際港那覇 ○二五〇
 国宝保存法 ○一〇九一
 甲突川デルタ ○二二一
 甲突川川底遺跡 ○六〇〇

甲突川流域の変更 ○三二四
 甲突川南部の変貌 ○四〇一
 甲突川五大石橋 ○一一〇〇
 工部省 ○六一四
 工芸 ○一〇七〇
 工業調査 ○三七四
 工業状況 ○三七九
 工業港 ○七五四
 工業 ○七七六
 工場規模 ○三七五
 工場の生産 ○三七九
 耕作規模別の農家数 ○四二四
 耕地の自作化進む ○四三〇
 郡山町 ○一二七
 郡山良平 ○一五三
 郡山氏 ○一五九
 郡本社 ○一二九
 郡本村 ○二〇二
 氷 ○三六九
 雇用 ○三四九
 公立中等教育機関の動的概観 ○八四一
 公立中学校の再建 ○九五一
 公益質舗事業の状況 ○一七三

公益質舗特別会計 〇二〇八
 公職適否審査委員会 〇七六
 公職追放 〇七六
 公園係の分離 〇四八八
 公園及び公園道路の決定 〇七二九
 公園事業 〇七三六
 公領の私領化 〇一一八
 公営住宅 〇七四五
 公務職 〇七七四
 公民の郡・高城郡・桑原郡・菱刈郡 〇一〇九
 公衆衛生 〇六四五
 公安委員会 〇五〇
 公平委員会 〇五三
 郷村の形成 〇四〇五
 郷中教育 〇四八二
 郷中の起源 〇四八三
 郷校 〇六五一
 郷士・城下士の待遇差を除く 〇六二四
 郷友会 〇七四四
 耕地の分布 〇四二九
 興業館 〇七六四

興業館時代 〇四二
 興国寺 〇五二四
 伊久の与党 〇二一五
 伊久薩摩守護職を守久に譲らず 〇二一五
 功成社 〇七六六
 交通社 〇七六二
 御領式 〇五三
 御内人 〇二四一
 功才 〇四一五
 墾田の兼併を許す 〇一〇七
 五月節句 〇五六一
 河野通英 〇六七五
 河野主一郎 〇六八〇
 後醍醐院真柱 〇四五五
 庚申講・二十三夜待講 〇五八二
 航空 〇五八八
 護国神社 〇一一二四
 固定資産評価審査委員会 〇五四
 港灣整備五カ年計画 〇七五二
 小形壺形土器 A 〇六九
 小形壺形土器 B 〇六九

小山田氏 〇一五九
 小正月 〇五六二
 小牧秀発 〇六八七
 児玉八次 〇六七八
 合理化政策の展開 〇一九
 合法主義と経済闘争 〇六八五
 購買力 〇三四二
 娯樂施設 〇三三一・三四七
 古代朝鮮の開国神話 〇九一
 古学 〇四五三
 古医方 〇四六二
 古跡 〇七〇八
 古社寺保存法 〇一〇九一
 古墳 〇一〇九二
 婚礼 〇五四二
 婚姻と離婚 〇八〇二

さ

税所氏系図 〇一五二
 税所義祐 〇一五四
 税所篤秀 〇一五五
 税所氏 〇一九五
 裁判所 〇六三三・七〇七
 済生会病院 〇六三六

最高裁判官国民審査 〇二六八
 在庁職と庄別当職の兼帯 〇一二三
 在家 〇一二四
 在家・菌・屋敷 〇二三六
 在家の階層分化 〇二三七
 在家の課役 〇二三八
 歳遣船制 〇二四八
 歳入の内容 〇二〇一
 歳出の内容とその推移 〇一九一
 歳出の内容 〇二〇五
 堺商人の琉球渡海 〇二四六
 堺商人による勘合貿易の請け負い 〇二四六
 相良義陽降伏す 〇二七四
 笹貫遺跡 〇六〇
 坂之上東前遺跡 〇六一
 桜田門外の変 〇三九五
 作与頭 〇四一五
 沙汰人・檢校 〇二四一
 西郷・月照の入水 〇三九二
 西郷の辞表 〇六〇二
 西郷の征韓論 〇六〇三

西郷への批判 ①六〇四
 西郷の門札 ①六五二
 西郷自刃 ①六六六
 西郷星 ①六六六
 西郷丹 ①六六七
 実久・勝良との離間を図る ①
 二六二
 実久・勝久を鹿兒島に攻む ①
 二六三
 実久と忠良・貴久の対立 ①二
 六三
 実久敗れて谷山から川辺に走る
 ①二六四
 実久と忠良の和議破る ①二六
 四
 実久和を請い出水に退く ①二
 六五
 佐賀の乱 ①六〇六
 砂糖専売制 ①七五八
 鮫島家高と惟宗師久の相論 ①
 一一一
 鮫島氏阿多氏所領を献じて降る
 ①二二二
 茶道 ①一〇八五

桜島 ①四七〇・一一〇一
 桜島の地質 ①二二
 桜島の活動 ①二三
 桜島の現状 ①二四
 桜島の大噴火 ①三八〇
 桜島一周道路の建設 ①七六〇
 ザビエル鹿兒島を去る ①三〇
 四
 薩摩君 ①一〇三
 薩摩の建国 ①一〇四
 薩摩の中心川内平野に移る ①
 一〇四
 薩摩大隅の接点としての鹿兒島
 郡 ①一〇四
 薩摩の評制 ①一〇五
 薩摩国正税帳 ①一一〇
 薩摩の郡院を藤原忠実へ寄進
 ①一一九
 薩摩平氏系図 ①一三二
 薩摩郡碓山城 ①一四四
 薩摩の硫黄 ①二四四
 薩摩船の参加 ①二四五
 薩摩の対鮮貿易 ①二四八
 薩摩武士の生活態度 ①三〇三
 薩摩の得た教訓は大である ①

三九八
 薩摩版 ①四八八
 薩摩刀 ①四九六
 薩摩の馬 ①四四四
 薩摩への疑惑 ①六二五
 薩摩琵琶 ①四九七・①一〇七
 九
 薩摩琵琶の起源 ①四九八
 薩摩切子 ①五〇二
 薩摩餅 ①三五六
 薩摩製糸株式会社 ①三六五
 薩摩の伝統 ①六五九
 薩摩木工争議 ①六八二
 薩摩狂句の変遷 ①一〇五九
 薩摩の君姓 ①一〇五
 薩摩日三州他家古城主来由記
 ①一三八
 薩摩の小番衆 ①二二〇
 薩摩の受図書人 ①二四九
 薩摩二国日向一郡を復す ①二
 八一
 薩摩軍使者口供 ①六七一
 薩摩軍回章 ①六八八
 薩摩家と阿久根 ①二五〇

薩摩家断絶 ①二七七
 薩摩学派 ①二五五・四四八
 薩英戦争 ①三九六
 サツマ辞書 ①四八九
 蚕糸講習所 ①七五四・七五六
 産馬会社 ①七五〇
 産婆 ①六二七
 産業別就業人口 ①七九七
 猿渡新左衛門尉秀雄 ①一九五
 雑誌 ①七二六
 雑夫・持夫 ①二四一
 讒謗律 ①六〇七
 三号住居址 ①七三
 三位大夫家藤原成子 ①一二四
 三条泰季 ①一七九
 三町会所の位置 ①三七二
 三町人口の推移 ①三七四
 三町の町名 ①三六九
 三国名勝図会 ①四五九
 三三郷中 ①四八二
 三月節句 ①五六〇
 三州社 ①七四四
 三州義塾 ①七四四
 三師範学校の規模 ①八四九

暫定業種別賃金 〇六八〇
士の持高別階層構成 〇三四〇

し

初代市長裁可 〇四
初代市長 〇二三
初代教授 〇四七八
助役 〇三・四一
収入役 〇三・四二
収税 〇七〇二
収支状況の推移 〇一六四
消防署 〇六三三
消防組の整備 〇二七八
消防組規則の公布 〇二七九
消防施設 〇二八六
消防の組織 〇七七一
縄文時代の生活 〇五五
縄文文化時代の日本語 〇九三
慈眼寺遺跡 〇六一
執印僧行賢 〇一二二
執印氏系図 〇一三一
地頭米 〇一六五
地頭山田氏 〇一二七
地頭加徴米 〇一四六

庄目代 〇一二三
庄政所の別当 〇一二三
シラス 〇六
将来の問題 〇二
菖蒲谷 〇一六五
白木山 〇一六五
白尾国柱 〇四五三
白尾国芳 〇六七九
清水館の麓 〇二二二
清水城建設の時期 〇二二三
清水城 〇二五九
重野安繹説 〇九五
重頼清敷を奪回す 〇二一七
重豪の開化政策 〇三七八
守護兼地頭島津忠時 〇一五四
守護島津貞久の安堵 〇一八五
守護国方間における封建的關係の成立 〇二二九
守護の御料所 〇二四一
庄園制の崩壊 〇二三五
使送船と興利船 〇二四七
常珠寺 〇二五三
質屋 〇三七七
質舗 〇五四三

泗川の戦 〇二八一
身体訓練 〇四八八
身体練磨 〇七一九
將軍義満兩島津氏の和解を計る 〇二一六
將軍義教忠国の功を賞す 〇二二六
將軍義満島津氏へ硫黄の上納を命ず 〇二四五
將軍義教忠国へ硫黄の上納を命ず 〇二四五
將軍義教忠国に琉球を与うといふ 〇二五一
受図書人制 〇二四七
渋川義俊 〇二四九
渋川満頼 〇二四九
渋谷重頼 〇二二四
渋谷四族 〇二二五
渋谷重頼を招く 〇二二五
渋谷重頼再び反す 〇二二七
渋谷一族の降伏 〇二七一
島津庄寄郡 〇一九・二二〇
・二二九・一四七
島津大炊助長久 〇一五六

島津忠宗 〇一五六
島津氏久 〇一八七
島津氏の鹿兒島郡司職兼帯 一九一
島津元久 〇二〇三
島津氏の拠点は山門院から鹿兒島郡へ 〇二〇四
島津庄の自滅 〇二一〇
島津氏幕府へ接近す 〇二二三
島津久豊頼娃を領す 〇二二四
島津伊久と元久不和となる 〇二二五
島津守久も渋谷重頼を招く 〇二二六
島津久豊の襲封 〇二一八
島津久世鹿兒島千年堂坊で自刃す 〇二二〇
島津忠朝と市来家親・入来院重長と対立 〇二二一
島津忠国三州の守護となる 〇二二四
島津久林を徳満城で亡す 〇二二四
島津持久慧燈院と諏訪社へ鹿兒

島郡の水田を寄進す 〇二二五
 島津立久の襲封 〇二二九
 島津忠昌の襲封 〇二三〇
 島津国久・季久の反乱 〇二三一
 島津一門連署して忠昌に忠誠を誓う 〇二三一
 島津国久・季久の党悉く忠昌に降る 〇二三一
 島津友久・国久の加世田城を降す 〇二三一
 島津豊久・菱刈氏・平山氏季久に应ず 〇二三一
 島津忠廉反す 〇二三三
 島津忠廉を飢肥へ移す 〇二三三
 四
 島津元久の対明交渉 〇二四三
 島津元久の献上品 〇二四三
 島津氏硫黄を幕府に売る 〇二四六
 四六
 島津伊久 〇二四八
 島津氏等は制限外 〇二四八
 島津久豊の交易 〇二四八
 島津氏琉球貿易の統制権をにぎ

る 〇二五一
 島津実久 〇二六〇
 島津忠昌 〇二六〇
 島津勝久守護職を貴久に譲る 〇二六〇
 島津実久の叛 〇二六一
 島津忠朝調停を図るも失敗す 〇二六一
 島津忠良没す 〇二七〇
 島津貴久没す 〇二七一
 島津氏の琉球貿易独占の要求 〇二九二
 島津氏の琉球貿易の独占体制の確立 〇二九六
 島津国史 〇四五六
 島津久通 〇四五六
 島津姓廃止 〇六二四
 島津免官 〇六二八
 島津賑恤金 〇六六四
 島津觀光株式会社 〇四六九
 舍弟忠重 〇一三二
 書契の発給権島津氏等に分散す 〇二四七
 諸将貴久を守護と仰ぐ 〇二六

五
 諸座附屋敷 〇三五四
 諸士家来の居住地 〇三五五
 諸紙興亡のあと 〇一一二
 獅子踊 〇五八六
 時代範囲 〇五九五
 書籍支配人 〇四八九
 書道 〇四九一 〇一〇七三
 十二夜待 〇五八二
 十五夜綱引 〇五八九
 十五夜踊 〇五八九
 支配・行政組織 〇四四〇
 支配の変遷 〇四〇六
 城ノ越IV式土器 〇七六
 城前田 〇一五七
 城の内外に役所を 〇三二二
 城の近くに上級武士 〇三五二
 城下町としての鹿児島 〇二二
 三
 城下士の家格 〇三三五
 城下士の数は藩士の五分の一 〇三三六
 城下士と郷士の差は大きかった 〇三三七

城下士は経済的にも優位 〇三三八
 城下士の持高 〇三四一
 城下士の組分け 〇三五七
 城下区域の拡張 〇三六五
 城下の整備 〇三八三
 城下士と外城士 〇四〇九
 城下士 〇六七八
 城山公園 〇四六五
 城山問題 〇四六八・一〇九八
 城西病院(尾畔病院) 〇六三四
 信仰 〇五七・七五
 信仰自由 〇六四三
 寺院は不侵・不犯の地 〇三一〇
 寺院の整理 〇五二九
 寺院の廃止 〇五三〇
 神武天皇東征説話の原型 〇九六
 六
 神社の崇敬 〇三一
 神社と住民 〇六四〇
 神仏分離 〇五三〇
 神仏混淆禁止 〇六三八
 神風連 〇六〇六

- 神道各派の推移 〇一一二五
 浄光明寺 〇一四四・五二五
 〇一一二七
 聚分韻略の刊行 〇二五五
 真宗解禁の事情 〇一一二七
 真宗本願寺派 〇一一三二
 真宗大谷派 〇一一三三
 祀場立内の祭 〇五七九
 上土層 〇三三九
 上水道の起源 〇七一七
 承久の乱 〇一三四・一五二
 取納帳 〇三四七
 銃隊学校 〇六五四
 賞典学校 〇六五五
 承恵社 〇七六一
 士族授産 〇七四六
 士族と平民の居住分布 〇七六九
 九
 士族の県外転出 〇七七一
 蒸汽船 〇四六七
 出陣兵士 〇六二〇
 壬申戸籍 〇七六七
 使節派遣内定 〇六〇〇
 出産 〇五四九
-
- 集会条例 〇六〇七
 集義塾建設本旨 〇六五五
 自由党 〇六〇七
 自由党解党 〇六一〇
 自由民権運動 〇七四一
 自由党史 〇七四二
 自由業 〇七七五
 自由市場 〇三三五
 自転車 〇五五四
 自動車 〇五五四
 自彊学舎規則 〇七一三
 商家の職種 〇三七四
 商通社 〇七六一
 商法会議所 〇七六五
 商業 〇七五八・七七八
 商業戸数 〇三〇八
 商業と資本 〇三一三・三三三
 商店の分布 〇三二〇
 商業報国会鹿児島市支部 〇三三四
 商業調査 〇三三六
 商業の分布 〇三三九
 商業の業種別 〇三四一
 商業の経営組織別 〇三四四
-
- 商業学校制度 〇八三一
 商店 〇三〇七
 商店の営業別 〇三〇九・三二九
 九
 職業 〇七七二
 職業の割合 〇七七九
 職業の配分 〇七七九
 職業の地域分布 〇七八〇
 職業と就職難 〇三三〇
 職業科関係 〇九七五
 職業別就業状態 〇七九九
 正八幡宮領荒田庄 〇一二一
 正八幡宮と石清水の関係 〇一二三
 正八幡宮領 〇一二九
 正平一統 〇一八六
 正建寺 〇五二七
 正月元日の行事 〇五五九
 正宮浜下り 〇五八〇
 示現流 〇三六二
 自願流 〇三六二
 自治体消防の設置 〇二八二
 新築地 〇三六五
 新照院 〇五二八
-
- 新聞紙条例 〇六〇七
 新聞 〇六一二
 新橋 〇五〇一
 新設の幼稚園 〇八七四
 新制中学校の教育課程 〇九四六
 六
 新制高等学校の性格 〇九五一
 新派和歌運動の興隆 〇一〇五四
 四
 実学 〇四五三
 寿国寺 〇五二七
 人配 〇四二五
 人配の起源 〇四三二
 人口密度 〇七九一
 人口構成 〇七九二
 人力車 〇六一二・〇五五〇
 儒教 〇三一一
 真言宗 〇二五三
 心岳寺詣 〇五六七
 下大隅郡 〇一一八
 下町十五町となる 〇三七〇
 下屋敷相對讓渡 〇六二四
 祝日 〇六一三
 招魂社 〇六一九

親兵 〇六三三
 巡查 〇六三四
 乗馬飼育会社 〇七五〇
 シングワサンチ 〇五六一
 女兒の内籠り 〇五五六
 宗門改め 〇四〇七
 宗門手札改め 〇五〇九
 宗教 〇七四五
 准中学校 〇六五三
 授産場 〇七〇八
 写真 〇四六六 〇一〇七四
 柴善次郎 〇六七五
 私学校 〇六五四
 私学校綱領 〇六五七
 私学校徒草牟田火薬庫襲う 〇六六〇
 私立幼稚園 〇八一二
 私立男子中等学校 〇八三五
 私立女子中等学校 〇八三六
 私立学校の動的概観 〇八四二
 私立鹿児島盲啞学校の進展 〇八六五
 私立鹿児島豊啞学院 〇八六五
 私立鹿児島中学校の新設 〇九

〇六
 私立中等学校の戦災 〇九一〇
 私立中学校の再建 〇九五七
 私立新制高等学校の成立 〇九五七
 私立高等学校の発展 〇九五七
 小弁済使 〇一二四
 小学校授業講習所 〇六五二
 小学校復興 〇六九五
 小学校令と教育行政 〇八〇七
 小学校の教科と教科書 〇八一
 六
 小学校教員の制服 〇八二二
 小学校教員の資格 〇八二〇
 小学校教育の改善 〇八四五
 小学校の新設増加 〇八七七
 小学校の鹿児島市移管 〇八七八
 小学校から国民学校へ 〇八八〇
 小学校制度の変革 〇九四〇
 小学校区教化連合会の成立 〇九九六
 児童・生徒学生の実情 〇九二

三
 尋常小学校 〇八一三
 尋常高等小学校の成立 〇八一七
 尋常小学校欠席児童の督促 〇八二〇
 師範学校復興 〇六九五
 師範教育 〇八二三
 師範教育制度の変革 〇八二四
 師範教育の高等教育化 〇九一
 一
 師範学校の統合 〇九一一
 女子師範学校 〇六五三
 少年教育 〇一〇〇六
 女子青年団の成立 〇九九六
 青年塾堂 〇一〇〇二
 青年教育 〇一〇〇七
 焼酎屋多し 〇三七四
 焼酎 〇三五七・三六五
 醤油 〇三五八
 醤油・味噌・酢・ソース 〇三六六
 樟脳 〇三六一・三六八
 恤救規則 〇五九八

集成館事業 〇三八六・四六六
 尚古集成館 〇四六九・一〇〇一
 尺八 〇一〇八〇
 詩吟 〇一〇八一
 重要美術品の保存に関する法律 〇一〇九一
 史跡・名勝・天然記念物保存法 〇一〇九二
 修練道場 〇八九四
 乗降客数及び貨物出入数 〇五六七
 し尿処理 〇六五四
 春闘法式 〇六九四
 思想指導委員会鹿児島市支部 〇九九二
 食糧 〇五六
 食生活の規制 〇五四一
 食料品 〇三七一
 食料危機突破協議会 〇六七九
 食肉センター特別会計 〇二二
 一
 漆器 〇三六二・三六八
 獣疫衛生 〇六四八

常任委員会 〇二四三

初期の会議細則及び会議規則

〇二四六

シヤウブ勧告以後の地方行政

〇一八

シヤウブ勧告と地方行政 〇一

六二

消費都市鹿児島 〇三九二

主要な社会教育施設 〇一〇一

一

主要な学校体育施設 〇一〇三

八

終戦前の疎開 〇四七

終戦直後軍政部駐在 〇四八

終戦直後の機構 〇五六

終戦 〇六八

終戦直後の混乱 〇七〇

終戦直後の市財政 〇一五六

終戦直後の消防 〇二八一

終戦直後の保健衛生 〇六二九

事業所調査 〇三三七

事業計画の概要 〇四五二

事業費 〇七三八

社寺 〇七〇六

社会福祉の歴史の解釈 〇五九

七

社会福祉の法的解釈 〇五九七

社会事業の主管課 〇六〇四

社会福祉関係法規の整備 〇六

一一二

社会福祉事業施設 〇六一四

社会福祉活動 〇六二一

社会通信教育 〇一〇一一

社会体育の発展方向 〇一〇五

一

社会教育の概念規定 〇九七七

社会教育施設概観 〇九九〇

社会教育活動概観 〇九九一

社会教育と鹿児島市学務課

〇九九一

社会教育委員会の設置 〇九九

二

社会教育課の成立 〇一〇〇四

社会教育委員 〇一〇〇五

社会教育の区分 〇一〇〇五

社会教育と市民憲章 〇一〇〇

六

社会教育放送 〇一〇一〇

昭和初期の地方行政 〇一一

昭和十八年度の市制の改正

一四

昭和二十年以後の地方行政

一五

昭和三十年以降の地方行政

二〇

昭和三十五年以降の地方行政

〇二一

昭和二十六年の機構 〇五七

昭和三十四年の機構 〇五八

昭和初期の歳入構造 〇一三九

昭和十五年の地方税制改革

〇一四五

昭和十五年地方税制改革以降

の市歳入の推移 〇一四八

昭和二十五年より三十九年度

までの鹿児島市財政 〇一六

四

昭和二十三年の鹿児島市財政

の推移 〇一八四

昭和三十年以降の地方財政の

推移 〇一七九

昭和三十年代末期から四十年代

初期の市財政 〇二〇〇

昭和三十年以降の特別会計お

よび公営企業の会計 〇二〇

八

昭和時代の選挙制度 〇二五四

昭和時代前期の市会議員選挙

〇二五七

昭和時代後期の市議会議員選挙

〇二五八

昭和期における消防 〇二八〇

昭和時代前期の経済界の推移

〇三二四

昭和時代後期の国内市場開拓

〇三五三

昭和時代前期の工業 〇三六九

昭和時代前期の水産業 〇四五

九

昭和時代後期の水産業 〇四六

〇

昭和時代前期の輸入 〇四九九

昭和時代の前期の輸出 〇五〇

三

昭和初期の金融恐慌 〇五二二

昭和時代前期の航路 〇五七四

昭和時代後期の交通概観 〇五

七五

昭和時代前期の電話 〇五九〇

昭和時代後期の電話 〇五九一

昭和時代前期の郵便 〇五九三

昭和時代後期の郵便 〇五九三

昭和時代の二区分 〇六〇三

昭和時代の葬法 〇六五七

昭和時代の墓地 〇六六二

昭和期の労働運動 〇六七〇

昭和四十年の組合運動 〇七一

五

昭和初期の大火 〇七七一

昭和時代の後期の大火 〇七七

一

昭和時代の風水害 〇七六六

昭和の爆発 〇七七五

昭和時代前期の学校教育の特質

〇八六八

昭和時代前期とその動向 〇九

八九

昭和時代後期の区分 〇一〇〇

三

昭和時代後期の美術 〇一〇六

八

昭和時代前期における全国的社

会体育概観 〇一〇四八

昭和時代後期における全国的社

会体育概観 〇一〇四八

昭和時代前期のキリスト教 〇

一一三八

昭和時代後期のキリスト教 〇

一一三九

市長 〇三

市長の選任方法の変遷 〇二二

市長選挙 〇二六八

市会議員選挙 〇三

市会の変遷 〇二三四

市議員の選挙 〇二三三

市会の沿革と権限 〇二三五

市会の審議状況 〇二四八

市議会の沿革と権限 〇二三七

市議会の審議状況 〇二四八

市議会事務局 〇二四五

市参事会 〇二四〇

市教育委員会委員選挙 〇二七

三

市農地委員会委員選挙 〇二七

三

市農業調整委員会委員選挙 〇

二七四

市制施行の経緯 〇一

市制施行当初の行政機構 〇三

市制施行初期の市歳入構成 〇

八八

市制施行当初の市歳出構成 〇

九二

市制施行当時の鹿児島市域 〇

七八二

市制町村制の改正 〇六

市町村制の公布と市財政制度

〇八五

市制発足当初の農業 〇三九四

市財政規模の膨張 〇九七

市財政の規模 〇一五六

市有財産について 〇二二六

市債現償高の推移 〇一七六

二二六

市歳入構成 〇一一六

市歳入の内容 〇一五八

市歳入の内容とその推移 〇一

六六

市歳出の推移 〇一四九・一六

〇・一六九

市歳出構造の特徴と主なる経費

の内容 〇一九二

市税収入の内容と推移 〇一一

七

市税収入の内容構成 〇一六六

市税収入の内容 〇一八六

市税以外の収入 〇一〇四

市税収入以外の歳入 〇一一〇

市民税の負担について 〇一八

七

市庁舎の移転新築 〇四四

市常会 〇六五

市紋章 〇七七

市民憲章 〇七八

市交通事業 〇一七〇

市交通事業の状況 〇二一六

市交通労組争議 〇七一四

市営バス 〇五七七

市民向け観光バス 〇四八二

市水道事業の状況 〇一七二

二二〇

市立病院 〇六三二

市立病院事業の状況	〇一七四	水力の開発	〇三八九	製氷	〇三六二	生産会社	〇七六〇
市立病院の事業概況	〇二二四	水道会計の状況	〇一三〇	製粉	〇三五九・三六六	生産手段装備状況	〇四三八
市立屠場	〇六四六	水産製造物	〇四五九	製麵	〇三六六	征韓論	〇五九九
市衛生自治団体連合会	〇六五	スーパードマーケット	〇三四	製陶	〇三六〇・三六七	赤十字社	〇六九一
二		三		製材	〇三六九・三七一	閑狩	〇三六〇
市公設市場	〇三一七	諏訪祭	〇五七七	製油	〇三六七	漸次立憲国家体制詔書	〇六〇
市と行商	〇三七八	諏訪会相撲	〇五八六	製茶	〇四〇四	七	
地域の拡大	〇三九二	諏訪神社	〇三一・五一七	清涼飲料水	〇三五八・三六五	前期倭寇と薩摩	〇二四三
市経済における農業	〇四三五	諏訪神社の由来	〇五七六	清掃事業	〇六五二	施薬院	〇六五〇
市民の旅行状況	〇四九四	諏訪神社の祭礼	〇四四一	西南部の台地	〇一一二	宣布大教	〇六四〇
市立鹿児島商業学校	〇八三二	諏訪社と島津氏	〇二〇二	西南役の話題	〇六九一	節句・祭日の料理	〇五四六
市立女子興業学校	〇八三三	摺付木	〇三六二	征韓録	〇四五六	催馬楽城	〇一四六
市立鹿児島補習女学校	〇八三	錫器	〇三六二	聖堂	〇四七七	関が原の戦い	〇二八一
三		スト規制法の成立	〇六八六	誓光寺	〇五二八	石鹼	〇三六二・三六九
市立商工補習学校	〇八三四	須々原遺跡	〇四四	成形図説	〇四六一	石炭ガスから油ガスへの転換	〇三九〇
市立実業補習学校	〇八五七	須恵器	〇七八	政体書	〇五九七	石敢当・力石	〇一一〇二
市立青年訓練所	〇八五八	雀方宮遺跡	〇五九	政令二〇一号	〇六七五	石体出現	〇一二二
市内の神社数の推移	〇一一二	調所の財政改革	〇三八二	雪舟・桂庵に師事す	〇二五五	潜伏キリシタン	〇五〇九
四		要領と開発領主の対立	〇一一	精神衛生	〇六四四	潜伏真宗信者	〇五一〇
市文化財保護調査委員	〇一〇	九		性病	〇六四一	禅宗	〇三〇九
九五		清酒	〇三五七	成人病	〇六四五	千眼寺	〇五二七
す		製紙	〇三六〇・三六八	青年学校の制度	〇九〇二	選挙管理委員会	〇五一
酔	〇三五九	製氷	〇三六二	青年学校の義務制実施	〇九〇	選挙を行なう権限	〇二三九
		製粉	〇三五九・三六六	三			
		製麵	〇三六六				
		製陶	〇三六〇・三六七				
		製材	〇三六九・三七一				
		製油	〇三六七				
		製茶	〇四〇四				
		清涼飲料水	〇三五八・三六五				
		清掃事業	〇六五二				
		西南部の台地	〇一一二				
		西南役の話題	〇六九一				
		征韓録	〇四五六				
		聖堂	〇四七七				
		誓光寺	〇五二八				
		成形図説	〇四六一				
		政体書	〇五九七				
		政令二〇一号	〇六七五				
		雪舟・桂庵に師事す	〇二五五				
		精神衛生	〇六四四				
		性病	〇六四一				
		成人病	〇六四五				
		青年学校の制度	〇九〇二				
		青年学校の義務制実施	〇九〇				
		三					

占領軍の日本進駐 〇七〇

占領政策 〇七一

占領軍の鹿屋進駐 〇七二

戦前の鹿児島市選出衆議院議員

選挙 〇二六三

戦前の鹿児島市出身県議会議員

選挙 〇二六一

戦前の観光宣伝 〇四八五

戦前の住宅事情 〇七四三

戦時下の行政機構 〇五五

戦時下の農業 〇四二五

戦時下の社会教育 〇九九〇

戦時下の社会教育活動 〇九九

戦時下の社会教育施設の変化

〇一〇〇二

戦時下の体育 〇一〇三五

戦時体制と観光行政 〇四八六

戦時の医療行政 〇六二八

戦時教育より平時教育への復原

〇九三八

戦時教育より平時教育への移行

措置 〇九五〇

戦時体制下の中学校教育 〇八

八八

戦時体制下の高等女学校教育

〇八九三

戦時体制下の教育 〇九〇九

戦時体制下の師範教育 〇九一

四

戦争成金藤田伝三郎 〇六九二

戦災都市復興計画に関する特別

会計 〇一七五

戦災による被害 〇七一九

戦災後の住宅対策 〇七四四

戦後処理 〇六六九

戦後より三十九年度までの特別

会計および公営事業 〇一七

〇

戦後の政党 〇二二二

戦後の鹿児島市出身県議会議員

選挙 〇二六三

戦後の鹿児島市選出衆議院議員

選挙 〇二六五

戦後の警察事務 〇二九五

戦後の工業 〇三七三

戦後の貸切バス 〇四八二

戦後の観光行政 〇四八八

戦後の住宅事情 〇七四五

全国総合開発計画と観光 〇四

九一

全国概観 〇六七三

全労鹿児島地方会議 〇七〇八

成人教育 〇一〇〇八

成人教育と団体活動 〇一〇〇

九

そ

惣地頭島津忠久 〇一三二

惣地頭職 〇一四三

惣庶間の係争 〇一六三

総州家の所領 〇二一九

総州家の本宗没落 〇二二三

宗氏による文引の発給 〇二四

七

曾県主 〇一〇三

曾槃 〇四六一

莊嚴寺 〇二五三

僧侶の活動 〇三一〇

造士館 〇四七六

葬式 〇五四三

葬式組 〇五五四

贈答 〇五四四

草牟田櫛 〇五九三

総戸数・人口 〇七〇三

総司令部―軍政部 〇七二

創設当時の任務 〇二九四

ソ族・昆虫族駆除 〇六五〇

賊軍墓地 〇六六七

族称 〇七九〇

蔬菜類の作付 〇四一八

蔬菜の作付 〇四一三

その他の特別会計 〇二一四

その他の私立学校 〇八六四

箏曲 〇一〇八〇

た

第一回拡張工事 〇七一八

第二回拡張工事 〇七二〇

第三回拡張工事 〇七二〇

第四回拡張工事 〇七二一

第五回拡張工事 〇七二二

第六回拡張工事 〇七二三

第七回拡張工事 〇七二四

第一期工事 〇七二六

第二期工事 〇七二七

- 第一次編入 ○七八三
 第二次編入 ○七八三
 第三次編入 ○七八三
 第四次編入 ○七八四
 第二代市長 ○二五
 第三代市長 ○二六
 第四代市長 ○二七
 第五代市長 ○二八
 第六代市長 ○二九
 第七代市長 ○三〇
 第八代市長 ○三〇
 第九代市長 ○三一
 第一〇代市長 ○三三
 第一一代市長 ○三四
 第一二代市長 ○三四
 第一三代市長 ○三五
 第一四代市長 ○三七
 第一五代市長 ○三八
 第一六代市長 ○三九
 第三号住居址の土器 ○六五
 第一回観光祭 ○四八五
 第九回せんもん祭り ○三三九
 第一回鹿兒島港修築工事 ○七
 五〇
-
- 第二回鹿兒島港修築工事 ○七
 五一
 第五国立銀行鹿兒島支店 ○五
 六二
 第四百七十七銀行 ○七六二
 第十五銀行の休業 ○三三二・
 五二四
 第三区立簡易商業学校 ○三〇
 五
 第七高等学校造士館 ○八三九
 ・九一五
 第七高等学校造士館の進展 ○
 八六六
 第七高等学校の高尾野移転と鹿
 兒島復帰 ○九六四
 第十管区海上保安本部 ○三〇
 三
 第一次大戦後の市政の変遷 ○
 八
 第二次大戦中の消防 ○二八一
 大鼓踊の起源 ○五八二
 大鼓踊の由来 ○五八三
 大鼓踊の奉納 ○五八四
 大正期の地方自治制度 ○七
-
- 大正期における市歳入歳出の規
 模 ○一一五
 大正期における財政制度上の改
 正点 ○一二四
 大正期における財政規模の伸長
 ○一一一
 大正期市歳出の推移 ○一二五
 大正時代の選挙制度 ○二五四
 大正時代の市会議員選挙 ○二
 五六
 大正時代の主要会社 ○三一
 五
 大正時代の商店の変遷 ○三一
 八
 大正時代の鹿兒島市内銀行 ○
 五一九
 大正時代の水産業 ○四五八
 大正時代の航路 ○五七二
 大正時代の電話 ○五九〇
 大正時代の郵便 ○五九三
 大正時代の葬法 ○六五七
 大正時代の墓地 ○六六二
 大正期の労働運動 ○六六九
 大正時代の風水害 ○七六六
-
- 大正年間の大火 ○七七〇
 大正三年の噴火 ○七七三
 大正時代のキリスト教 ○一一
 三七
 大正・昭和時代 ○五五
 大正・昭和時代の政党 ○二三
 一
 大竜小学校遺跡 ○四一
 大竜遺跡 ○五九
 大竜寺 ○五二二
 大丸 ○一六一
 大願寺 ○二五三
 大宰大監平季基 ○一一七
 大宰大式藤原惟憲 ○一一七
 大宰府領 ○一一一
 大興寺 ○二五三・五二〇
 大慈寺 ○二五三
 大身分 ○三三五
 太閤検地 ○四一六
 大支配 ○四一九
 大乘院 ○五二〇
 大政奉還 ○五九六
 大砲塾 ○六三五
 大政翼賛会 ○六一

大日本紡績株式会社 ○三六四
 太陽曆 ○六一三
 太政官 ○五九七
 太平洋戦争ぼつ発と地方行政
 ○一三
 太平洋戦争と鹿児島市内の金融
 界 ○五三〇
 タクシー ○五五五・五八一
 谷山郡 ○一二七
 谷山氏系図 ○一三八
 谷山仏心 ○二二四
 谷山氏滅亡 ○二一四
 谷山隆信 ○一七九
 谷山市との合併 ○二二・四五
 五
 多々良浜合戦 ○一七八
 鷹島合戦 ○一六四
 貴久清水城を脱出し田布施へ帰
 る ○二六二
 貴久・伊集院より鹿児島に移る
 ○二六六
 達志館 ○四八一
 田上川デルタの地形 ○一六
 田上川デルタの歴史的意義 ○

一八
 田上領主 ○一四二
 田上水車館 ○三九〇
 田平 ○一六五
 田中太左衛門 ○六八五
 田中東穂 ○六八七
 田代親常 ○四六九
 玉里遺跡 ○五九
 玉里邸 ○四九四
 竹下盛隆 ○六八一
 竹添節 ○六八四
 竹製品 ○三六二・三六八
 忠良 ○一三二
 忠良・南薩地方を確保する
 ○二六四
 忠廉相良氏と結ぶ ○二三三
 忠廉与党と共に忠昌に降る ○
 二三三
 忠昌伊集院内城へ移る ○二三
 一
 忠昌自ら久逸を討つて降す ○
 二三四
 忠昌自刃す ○二三四
 忠昌・東郷重香・入来院重聡・

肝付兼連に盟書を送る ○二
 三二
 忠国末吉へ移る ○二二四
 忠国大覚寺門跡義昭を討つ ○
 二二六
 忠国鹿児島に帰り弟持久を追う
 ○二二六
 忠国高木氏を亡す ○二二七
 忠国・用久と和解す ○二二七
 忠国伊東祐堯と和す ○二二七
 忠国その子立久と不和になり加
 世田に移る ○二二八
 忠国加世田で死す ○二二九
 忠国諏訪社の発法を定む ○二
 三〇
 忠国と琉球貿易 ○二五一
 高城氏の分裂 ○二三三
 高城珠全を宗祇 ○二五五
 高木匡家戦死 ○二一九
 高木氏・市来氏持久に応ず ○
 二二六
 高木敬助 ○六八五
 高見遺跡 ○六〇
 高橋Ⅱ式 ○六二

高杯形土器 ○七〇
 高塚古墳 ○七七
 高崎正風 ○四七五
 武・田上地区区画整理事業 ○
 七三九
 立久・野辺寛柔と入来院重豊の
 旧領を安堵す ○二二八
 立久諏訪社に別府村の地を寄進
 す ○二二八
 立久浦上則宗に国役免除を依頼
 して成功す ○二三〇
 立久死す ○二三〇
 立待 ○五五一・五五七
 待捨流 ○三六二
 宅間道心 ○六八五
 宅地造成等規制区域の指定 ○
 七四九
 対外貿易における薩隅領主層の
 課題 ○二四三
 平盛子 ○一二四
 台風の雨 ○三一
 台風銀座 ○三一
 台風の風 ○三四
 台風の名前の変遷 ○七六八

- 七夕 ⑤五六一・五六四
- 単独相続 ⑤一九六
- 足袋 ⑤五四一
- 団々珍聞 ⑥六〇八
- 代銀納 ⑥三五〇
- 煙草製造工場 ⑥三五五
- 頼母子講 ⑤五四六
- 男女両師範学校の附属小学校 ⑥八八四
- ⑥八八四
- 体錬科の創設 ⑥一〇三五
- 体育行政制度の整備 ⑥一〇三三

ち

- 治安維持法 ⑥六六八
- 治安警察法 ⑥六六八
- 中学校復興 ⑥六九五
- 中等教育の概観 ⑥八七〇
- 中学校令施行規則の改正と県立 ⑥八八六
- 二中の具体的教育 ⑥八八六
- 中間 ⑥二四一
- 中国人の著書にあらわれた鹿兒 ⑥二八四
- 島の港 ⑥二八四
- 中世の浮免 ⑥四三二

- 中馬八郎 ⑥六八一
- 中央平野の意義 ⑥二二二
- 中央卸売市場特別会計 ⑥二二〇
- 中央工業地域への若年人口流出 ⑥七一〇
- 地下式土壙 ⑥七七七
- 地下式板石積石室 ⑥七七七
- 地下 ⑥二四一
- 地域 ⑥四三七・四三九・四四二
- 地租改正 ⑥六九五・六一五
- 地租改正再開 ⑥六九六
- 地租改正結果 ⑥六九七
- 地方行政制度の改正 ⑥一一一
- 地方税制の推移 ⑥一一三
- 地方自治の伸長と地方財政の窮迫 ⑥一三四
- 地方財政制度の改革 ⑥一五三
- 地方財政法の制定 ⑥一五五
- 地方財政の赤字危機 ⑥一七七
- 地方公営企業会計の状況 ⑥二一六
- 地方公営企業法の施行 ⑥七二二

三

- 知行高取納 ⑥三四七
- 知行物定帳 ⑥四三四
- 知政所 ⑥六二二
- 知的教養 ⑥七一一
- 知識兼雄 ⑥七四九
- 町内会 ⑥六三三
- 町内会廃止 ⑥六八八
- 町人と武家の人口 ⑥三二六
- 町界・町名地番整理委員会 ⑥七四一
- 秩禄処分 ⑥六五九
- 秩禄処分始まる ⑥六九五
- 秩禄公債 ⑥六一五
- 筑前守都御西 ⑥一一六
- 知覧を佐多大寺氏に宛行う ⑥二二二
- 知事選挙 ⑥二七二
- 賃銀 ⑥三一一・三二二・三三二
- 七
- 鎮西管領の宛行行為と幕府による安堵 ⑥一九一
- 築堤と海岸埋め立て ⑥三六五
- 茶屋 ⑥四四三

つ

- 着袴祝 ⑥五五〇
- チハヤビト説 ⑥一〇〇
- チャンモチ ⑥五六二
- 帖佐瓜生野移転説 ⑥三一七
- 鳥類の蒐集 ⑥四六二
- 朝鮮との外交問題 ⑥五九九
- 徴兵令 ⑥二九六
- 長期農業振興計画 ⑥四四六
- 調査権 ⑥二九九
- 彫刻 ⑥一〇七一
- 直真影流 ⑥三六四
- 鶴丸城 ⑥二六〇
- 鶴丸城に抛る ⑥二八二
- 鶴丸城構築に対する義弘の不安 ⑥三二八
- 鶴嶺神社 ⑥五三二・一一二
- 二
- 鶴嶺女学校 ⑥八三六
- 鶴嶺女学校と鶴嶺高等女学校 ⑥八六一
- 鶴嶺女学校・鶴嶺高等女学校 ⑥九〇七

鶴嶺雜誌 〇七二九

継豊 〇三三四

綱貴 〇三三四

塚本長民 〇六八九

塚田・蒲原 〇一五五

つくしの税所次郎 〇一五二

壺形土器A 〇六八

壺形土器C 〇六八

築地役覆勘状 〇一五八

附衆中廢止 〇六二四

通常の風 〇三三

津久寺 〇二五三

追放解除 〇七七

佃煮 〇三六九

漬物 〇三六九

通俗教育と社会教育 〇九七六

て

寺田屋事件 〇三九五

寺師正容 〇四六七

定期遊覧バス 〇四七九

鉄道 〇六一三・〇五六三

鉄道降車客数 〇四七八

鉄道施設の復興 〇五八二

鉄道貨物輸送取扱数 〇五八五

照国神社 〇一一二

テレビ放送 〇一一五

テレビ放送開始 〇一一八

天正三年の琉球使節 〇二九六

天正十三年の琉球使節 〇二九八

天正十五年以後の薩琉關係 〇二九九

天祥一麟 〇二五三

天守閣のない鶴丸城 〇三二二

天吹 〇五〇〇

天保山護岸工事 〇七五七

電信 〇六一二

電車 〇五七六

電産争議 〇六九〇

電源スト 〇六八八

伝染病予防 〇六三七

テントマツイ 〇五六五

東福寺城 〇一四四・二五九

東福寺城と催馬楽城 〇一七九

東郷氏を討つ 〇二二三

東郷鳥丸村の奥の藪と奥の門 〇二三八

徳政令 〇一七六

徳育行事 〇七一九

徳性涵養 〇七一四

頭殿 〇五七七

頭殿の由来 〇五七八

土曠出土の土器 〇六五

土地割替制の起源 〇四三〇

土豪の特典 〇一一八

土岐半介 〇六八二

土木費の内容 〇一二八

土地区画整理事業 〇七三四

土地区画整理委員会の設置 〇七三六

土地区画整理審査会の設置 〇七三六

土佐 〇七四一

陶器 〇七〇八

陶芸 〇一〇七一

討幕の実現 〇四〇一

討幕軍 〇六一八

都市と農村 〇三九三

都市計画法適用の指定 〇七二

都市計画街路の決定 〇七二九

独立復興時代の鹿児島市内の学

校概観 〇九二九

独立復興時代の社会教育関係法

規 〇一〇〇四

独立復興時代の学校体育 〇一〇三七

道路 〇七〇五・〇五四八

道路の開発整備 〇七五八

特別会計の推移 〇一五一

特別委員会 〇二四四

特殊教育の制度と施設 〇八三

特殊教育の概念 〇八三七

特殊学級の制度 〇九五九

塔之原遺跡 〇四三

唐湊遺跡 〇六〇

堂園遺跡 〇六〇

東南アジア稲作文化系神話の混

入 〇九一

当知行地安堵 〇一七五

友久・国久と共に反す 〇二三

富山浦・乃而浦・塩浦 〇二四
七

富岡工場 〇六一四

東帰庵 〇二五四

歳久の自刃 〇二七七

鳥羽伏見の戦 〇五九六

徳丸吉蔵 〇六八五

当時の市税負担 〇八八

動力ポンプ 〇二八四

度量衡器 〇三六九

トラツク 〇五八二

トラホーム 〇六三九

島陰寺 〇二五四

島陰漁唱 〇二五五

島陰雑著 〇二五五

所三役 〇四一四

な

斉彬藩主となる 〇三八六

斉彬急死す 〇三九二

斉彬造船事業に力を尽くす 〇
三九〇

斉彬の訓論 〇四七九

斉彬の改革 〇四八五

齊宣と近思録くずれ 〇三八一
成川式土器南九州第Ⅴ様式 〇
六七

中俣氏 〇一五九

中俣村 〇一五三

中宿者 〇三七二

中宿 〇四一〇

中神怡顔齋 〇四七三

中尾亮左衛門 〇六八六

中村 〇二〇二

中村氏 〇一四二

中村寛澄 〇一四二

中村政吉 〇六八八

中原来泉 〇六六〇

直久 〇一二八

波平行安 〇四九六

長崎信夫 〇六七九

仲翁守邦 〇二一八

仲翁・足利学校や惣持寺に学ぶ
〇二五三

永吉村 〇一四四

七日節句 〇五六二

七草ガユ 〇五五九

七社遺跡 〇三九

七歳の祝 〇五五〇
ナポリ通り 〇八三

ナポリ市と姉妹都市 〇八二

夏の気温 〇二七

夏 〇三五

菜種油 〇三六〇

菜種油粕 〇三六〇

並木式 〇四八

生麦事件 〇三九五

内検 〇四一八

内燃機械工業 〇三七一

鍋釜 〇三六二

ナレナレ 〇五六三

南方の国方阿多氏に与同す 〇
二二一

南下の大友軍を破る 〇二七四

南泉院 〇五一九

南林寺 〇五二四

南林寺六月灯 〇五七一

南洲神社 〇六六九・〇一一二
三

南洲神社遺跡 〇四〇

南海郵船争議 〇七一

南国交通株式会社 〇五八〇

新納忠統を飢肥に移す 〇二二
七

新納忠統・伊作久逸鹿兒島を守
る 〇二二一

新納忠統・伊作久逸と対立 〇
二二三

新納忠統を志布志へ移す 〇二
三四

西田・三町の町名 〇三七〇

西田橋 〇五〇一

西田寺 〇五二七

西俣久盛 〇一六〇

西鹿兒島駅 〇四七七

西平式 〇五二

二松学舎記 〇七二〇

二階堂氏没落 〇二一六

二号住居址 〇七二

二才組 〇五五一

二棟造 〇五三八

二・一スト 〇六八〇

仁礼猶助 〇六七九

日明勘合貿易 〇二八七

日本銀行 〇六一五

日本民主化 〇六六七
 日本瓦斯株式会社の設立 〇三九〇
 日本ガスの賃金争議 〇七〇五
 日本ガス争議 〇七一一
 日本水電株式会社の事業継承 〇三八九
 日本独立後の鹿児島市内の金融界 〇五三六
 日本の労働組合主義 〇七〇八
 日本占領軍の教育管理政策 〇九三九
 日隅の地に実久の威振るう 二六四
 日赤鹿児島支部診療所及び日赤錦江病院 〇六三五
 日豊線開通 〇五六五
 日舞 〇一〇八五
 日清戦争と鹿児島 〇二九七
 日華事变ぼつ発と地方行政 一一二
 日華事变のぼつ発 〇六一
 日華事变ぼつ発の市財政に与えた影響 〇一四一

日華事变と鹿児島市内の金融界 〇五二八
 荷馬車 〇五五三
 乳牛 〇四〇六・四一一・四一八・四二二
 鶏 〇四一九・四二二
 寧波の乱 〇二九〇

ね

年平均気温の特色 〇二六
 年間降水量 〇二九
 年中行事 〇四七四
 年行司どんの飴渡し 〇五六〇
 年賀郵便 〇五九五
 襦袢清平 〇二二四
 襦袢重清・新納忠治・肝付兼忠・樺山孝久と盟書を交換し忠国へ忠誠を誓う 〇二二七
 ネン打 〇五九〇

の

野村忍助 〇六八一
 農民 〇四一一
 農民生活 〇三九五

農家 〇四〇三・四〇七・四一

一・四一四・四一六・四一九
 ・四二四

農家の常食 〇五四二
 農家の間取 〇五三八
 農家の経済 〇三九八
 農家戸数の推移 〇四〇一
 農家の構成 〇四三五
 農家の推移 〇四三八
 農事社 〇七〇八・七四九
 農業 〇七七六
 農業の推移 〇四四三
 農業業態別 〇四三七
 農業構造改善事業 〇四四八
 農業従事形態 〇四三八
 農地 〇四〇三・四〇八・四一
 一・四一五・四一七・四二〇
 ・四二四
 農作物 〇四一二・四二一・四二四・四三八
 農地委員会 〇五〇
 農地改革 〇四二八
 農地解放の実績 〇四三三
 農産物 〇三九五

農産物消費市場 〇三九三

農産物の作付状況 〇四〇四
 農産物の作付面積・収穫高 〇四〇八

農村部 〇四〇〇
 農業委員会委員選挙 〇二七四
 農用地の構成 〇四三六
 農林行政機構 〇四四四
 野島と木場 〇二二六
 野島の定昌化 〇二二七
 乗合自動車 〇五五八

は

長谷場・矢上の地名 〇一三六
 長谷場系図 〇一三七
 長谷場氏 〇一三八
 長谷場氏の所領支配 〇一九一
 班田制の実施を見ず 〇一〇六
 班田の実施 〇一一五
 班田制の衰退 〇一一六
 八幡境廻り 〇一一一
 八幡の正宮を主張す 〇一二二
 隼人の伝承 〇九二
 隼人の習俗 〇一〇一

- 隼人の身分 〇一〇七
- 隼人の課役 〇一〇七
- 隼人の番上制 〇一〇八
- 隼人の隷属関係 〇一〇九
- 隼人の郡 〇一一〇
- 隼人の公民法 〇一一五
- 早人説 〇一〇〇
- ハヤシビト説 〇一〇〇
- ハヤチ説 〇一〇〇
- ハヤ地名説 〇一〇〇
- 幕府元久を日隅守護職に補す 〇二一六
- 幕府元久を薩摩守護職に補す 〇二一七
- 幕府忠国を支持す 〇二二六
- 幕府忠国に段銭の完納を催促す 〇二二九
- 幕府の威令薩隅に及ばず 二九
- 幕府の統制貿易 〇二四二
- 幕府薩隅へ倭寇の禁庄を命ず 〇二四三
- 幕府島津氏に遣明船の警固を命ず 〇二四六
- 幕府島津忠昌に琉球船の来航あつせんを命ず 〇二四七
- 廢藩置県 〇五九八・六二七
- 廢仏毀釈 〇五二八
- 藩政改革 〇六二一
- 藩の人口 〇三二八
- 藩財政の困窮 〇三八〇
- 藩主の論書 〇三九四
- 藩政時代の禁教政策 〇一一三
- 五
- 初商 〇五五九・五六五
- 初市 〇五六六
- 初山人 〇五六二
- 萩の乱 〇六〇六
- 萩原貞頭 〇六八六
- 鉢形土器 〇七〇
- 土師器 〇七八
- 羽島氏 〇一九四
- 島山政長立久を招く 〇二三〇
- 繁栄方 〇三七八
- 咄相中掟 〇四八四
- 番役 〇五一一
- 二十日正月 〇五六三
- 機織と染色 〇五三九
- 働着 〇五三九
- 晴れの日の食物 〇五四二
- 版籍奉還 〇五九七
- ハレギとケギ 〇五三九
- ハツイリ 〇五五三
- ハラメ 〇五六三
- ハマ投げ 〇五九〇
- 春 〇三五
- 春駒餅 〇五九三
- 梅雨期の雨 〇三〇
- 梅寿 〇二一五
- 八田知紀 〇四五四
- 八朔 〇五六一
- 橋口仲五郎 〇六八六
- 博愛社 〇七四四
- 畑作農業 〇四二〇
- 馬車 〇五五三
- 林田産業交通株式会社 〇五八
- 〇
- 破防法反対集会 〇六八九
- 反対運動 〇七三七
- 原良地区区画整理事業 〇七三
- 九
- 俳句の変遷 〇一〇五七
- 管崎石築地鹿兒島東方分 〇一四二
- 管崎役所石 〇一五七
- ひ
- 比志島彦太郎義範 〇一六二
- 比志島孫太郎忠範 〇一五七
- 比志島忠範 〇一六〇
- 比志島氏 〇一九五
- 比志島範平 〇一七八
- 比志島貞範 〇一七八
- 比志島久範 〇一八九・二一九
- 比志島氏の構成 〇一八二
- 比志島氏の思想面 〇一八二
- 比志島義範 〇一七五
- 比志島・小山田・川田・東侯・厚地・油須木 〇一四七
- 比志島・河田・西侯・城前田・上原菌五方所名主職 〇一五
- 一
- 比志島・西侯・河田三方名負担の正八幡宮造営役配分 〇一五七
- 比志島名水田地頭御方目録 〇一

五八

- 比志島氏の惣庶関係 〇一六三
- 久豊給黎を攻略して和泉大寺・長野氏に宛行う 〇二二〇
- 久豊頼久と原良に戦つて撃退す 〇二二〇
- 久豊伊作氏を援く 〇二二一
- 久豊頼久を谷山で破る 〇二二一
- 久豊撰宿より奈良兄弟を追放す 〇二二一
- 久豊川辺で大敗す 〇二二一
- 久豊永利を攻略して重長に与う 〇二二二
- 久豊頼娃氏をほろぼして肝付兼政に宛行う 〇二二二
- 久豊島津忠朝を降して鹿児島へ移す 〇二二三
- 久豊日向に向こう 〇二二三
- 久豊死す 〇二二四
- 久豊加江田城を攻略す 〇二二四
- 秀吉・大友氏との和議をすすむ 〇二七五

秀吉の軍九州に入る 〇二七六

- 久逸伊東祐国と共に反す 〇二二三
- 久逸を伊作に移す 〇二三四
- 日向肥人朝戸君 〇九九
- 日向守安部弘行 〇一六
- 日向の戦況 〇二六九
- 日向国餓肥北郷 〇一九二
- 肥前介笠宗雄 〇一一六
- 肥前系平氏による郡院司職の占有 〇一二四
- 東桜島のオトムレ 〇五五五
- 東桜島姫宮神社浜下り 〇五六九
- 東桜島の伊勢講 〇五八二
- 病院 〇七〇三・七〇七
- 日の丸 〇三九〇・四六八
- 平川遺跡 〇四四
- 平土層 〇三三九
- 平町人 〇三七二
- 平山佐八郎 〇六八二
- 光山貝塚 〇四五
- 百姓と給人の経営 〇二三八
- 一屋敷当たりの家屋敷 〇三三五

六

- 琵琶の改良 〇四九八
- 肥後直治 〇六八三
- 肥後の攻略 〇二七四
- 評論新聞は西郷軍のスパイ 〇六九二
- 菱刈氏攻略 〇二七〇
- 膝直し 〇五五三
- 比丘尼菩薩房 〇一五〇
- 広木 〇四四〇
- 百貨店 〇三四四
- 肥料 〇三六〇・三六七
- 肥薩線(旧鹿児島本線)開通 〇五六三
- 飛行場建設工事着工 〇七五四
- 被占領時代の鹿児島市内の金融界 〇五三二
- 被害者の救助と災害防止 〇七六八
- 被占領統治時代の制約 〇九二
- 被占領統治時代と独立復興時代 〇九二三
- 被占領統治時代の鹿児島市内の

学校概観 〇九二七

- 被占領時代の社会教育関係法規の成立 〇一〇〇三
- 被占領統治時代の学校体育 〇一〇三六
- ふ
- 福昌寺 〇一九三・三〇九・五二二
- 福昌寺遺跡 〇四二
- 福昌寺の建立 〇二一八
- 福昌寺・諏訪神社の門前 〇二二
- 福昌寺・広濟寺・妙円寺 〇二五二
- 福島事件 〇六〇八
- 福沢諭吉 〇六一二
- 不断光院 〇五二六・一一二
- 不動寺遺跡 〇六一
- 不動寺遺跡出土の土器片 〇六六
- 不参の輩 〇一八四
- 不況下の市財政 〇一三六

不定期遊覧バス 〇四七九
 冬 〇三七
 冬の特徴 〇二八
 冬の寒さの理由 〇二八
 袋谷の成因 〇一四
 府領社 〇一二九
 府学蔵版 〇四八八
 藤原頼通に寄進 〇一一七
 藤原基実 〇一二四
 藤内康友 〇一三一
 服飾 〇五四〇
 舟乗初め 〇五六五
 婦人教育 〇一〇〇九
 附籍 〇七七一
 附属小学校 〇八二二
 副使桂庵玄樹帰路一・二号船は薩摩を経由す 〇二四六
 岐直 〇一〇三
 洲辺元副 〇六七九
 フランシスコ・ザビエルの来朝 〇三〇一
 撫育会社 〇七六一
 武士の衣生活 〇五四四
 武士の食生活 〇五四五

武家屋敷 〇四九四
 武家の婚姻 〇五五七
 仏教各宗の勢力分布 〇五一五
 物価 〇三一・三二一・三三二
 六
 豚 〇四九・四二二
 文保元年薩摩国御家人交名 〇一四二
 文保元年御家人交名 〇一六〇
 文祿の役 〇二七七
 文祿の検地 〇二七七
 文書奉行 〇四五六
 文明十五年の遣明船は南海路を薩摩に寄港す 〇二四六
 文明版大学 〇二五四
 文之 〇五二二
 文芸界の変遷 〇一〇六二
 文化 〇五七
 文化事業 〇三七九
 文化財保護法 〇一〇九二
 文化財の指定 〇一〇九三
 兵器隊 〇六三五
 へ

平和推進県民会議 〇六八八
 米兵の暴行 〇七五
 米作 〇三九九
 別館新築 〇四八
 別府氏久豊に帰服す 〇二二二
 別名 〇一四四
 辺境型名の視型 〇二一七
 辺牟木氏 〇一六一
 変則中学校 〇六五二
 べんざし 〇二四一
 ほ
 本田重経を追放す 〇二二七
 本田董親を荘内に走らす 〇二六五
 六五
 本所は近衛家領家は一乗院となる 〇一二四
 本郡司平忠純 〇一三〇
 本物返 〇一七六
 本能寺の変 〇二七四
 本草学 〇四六一
 本立寺 〇五二五
 本市の総人口 〇七八七
 本市人口の男女比 〇七八七

本市人口増の政治的要因 〇七八
 本市人口移動の社会的軍事的要因 〇七八九
 本市人口増の政治的要因 〇七九〇
 本市農業の兼業化傾向 〇四四〇
 〇
 本市の組合結成 〇六七七
 本市内の寺院数の推移 〇一一三
 三四
 法難くずれ 〇五一二
 法文学部・理学部の新設 〇九六
 六七
 宝徳三年の遣明船 〇二四四
 宝持院 〇五二二
 砲台 〇六三五
 砲兵学校 〇六五四
 保と別名 〇一一八
 保司職・名主職・郷司職 〇一一八
 一八
 保護会社 〇七六一
 保健所 〇六四八
 細川勝元立久を招く 〇二三〇

細川氏島津立久に琉球貿易の統

制を命ず 〇二四六

細川氏と大友氏の対立 〇二八

八

北方系民族による狗奴国の建国

〇九五

北郷持久を安永古江村に移す

〇二二九

堀内 〇一六五

封建的土地所有の画期 〇二二

九

歩兵第四五連隊 〇二九七

菩提所 〇五〇四

盆 〇五六四

戊辰役賞典禄 〇六五九

紡績所 〇七六三

貿易制度と為替相場 〇五〇四

母子衛生 〇六四三

防火地域及び準防火地域の指定

〇七三二

放送会館完成 〇一一〇

ポルトガル船の来朝 〇三〇一

ホダレ 〇五六三

ホゼ 〇五六五

ボンタン鉛工場争議 〇六七〇

ま

町奉行 〇三七一

町奉行の巡見 〇三七二

町の支配体制 〇三七一

町役 〇三七二

町の負担 〇三七三

町風琵琶 〇四九九

町踊 〇五八五

前平遺跡 〇四〇

前平式 〇四六

前田軍左衛門 〇六八四

蒔高 〇二四一

蒔見 〇四一八

丸岡遺跡 〇四〇

丸田正房 〇四九六

松本武雄 〇六七五

松原神社 〇五三二

満州事変と市財政 〇一三七

慢性伝染病 〇六三九

み

満家院司 〇一二四

満家四郎長(永)平 〇一五〇

満家院郡司名田 〇一五四

満家院内の所領相論 〇一五六

満家院惣領主 〇一五九

満家院一族中 〇一六三

満家院郡司 〇一八九

満家院地頭職 〇一九八

名字書出 〇一九三

名字 〇四二一・四二六

名頭 〇四二六

名頭乙名 〇四二一

名主 〇一二四

南九州第IV様式 〇六七

南朝鮮語の移入 〇九三

南殿 〇二一五

南仲景周・石屋真梁等南禅寺の

蒙山に師事す 〇二五二

南に広がる武家屋敷 〇三五三

南日本放送争議 〇七一一

南日本新聞 〇一〇九

三重岳 〇九

三重野遺跡 〇四三

三輪王朝の成立 〇九六

港町としての鹿兒島 〇二二三

・二八三

光久 〇三三一

妙谷寺 〇五二四

妙頭寺 〇五二七

屯倉設置の痕跡は見られない

〇一〇二

弥勒寺講師職等を兼帯す 〇一

二三

明の統制貿易 〇二四二

民選議院設立建白 〇六〇六

宮原新助 〇六八四

見合 〇五五二

土産品 〇四七五

土産品販売所 〇四八八

味噌 〇三五八

水飴 〇三六七

民間貸切バス 〇四八四

民俗資料 〇一〇九三

未曾有の戦災 〇七三〇

む

向島北上鼻崎 〇一二九

向島 〇一九七

向島黒神村の大噴火 〇二三〇

向島の大噴火 〇二二二
 向島地頭 〇二六四
 村上頼重 〇一五一
 室町期の百姓の汎称も在家とい
 う 〇二四一
 〇二四一
 宗信 〇三三四
 無尽会社衆成社 〇七六三
 無形文化財 〇一〇九三
 紫原地区区画整理事業 〇七四
 〇

め

明治八年 〇七三五
 明治九年 〇七三五
 明治十年 〇七三六
 明治十一年 〇七三七
 明治十二年 〇七三八
 明治十三年 〇七三八
 明治十四年 〇七三九
 明治十五年 〇七四〇
 明治十年の学校 〇六五三
 明治時代 〇五四
 明治後半期市歳入の推移 〇九六
 明治後半期における市税収入の
 推移 〇九八

明治後半期における市歳出の推
 移 〇一〇七
 明治十年代の政党 〇二二九
 明治時代の選挙制度 〇二五三
 明治時代の市会議員選挙 〇二
 五五
 明治初年の消防 〇二七七
 明治時代の同業組合 〇三五一
 明治時代の水産業 〇四五六
 明治時代の鹿児島市内銀行 〇
 五一四
 明治時代の海上交通 〇五六八
 明治時代の電話 〇五八九
 明治時代の郵便 〇五九二
 明治時代の葬法 〇六五六
 明治時代の墓地 〇六五九
 明治期の労働運動 〇六六九
 明治時代の風水害 〇七六四
 明治年間の大火 〇七七〇
 明治時代より昭和時代前期まで
 の体育行政 〇一〇三三
 明治時代のキリスト教 〇一一
 三五
 明治・大正時代の輸入 〇四九

六

明治・大正時代の輸出 〇五〇
 一
 明治・大正時代の時間的範囲
 〇九七七
 明時館 〇四六四
 明六社 〇六一二
 芽の餅 〇五六〇
 メノモチ 〇五六二
 名誉市民 〇八〇
 銘仙 〇三六四

も

元久の与党 〇二一五
 元久・鶴田で敗る 〇二一五
 元久伊作久義 〇二一五
 元久襦袢清平に所領を宛行う
 〇二一六
 元久・上京す 〇二一七
 元久・死す 〇二一七
 持久谷山に反す 〇二二六
 用久の与党悉く忠国に降る 〇
 二二七
 守永守 〇六八七

蒙古神話

蒙古神話 〇九一
 毛利正直 〇四六九
 盲学校及聾啞学校令の成立 〇
 八六四
 盲学校・聾学校の制度 〇九五
 八
 木製品 〇三六八
 木材港 〇七五四
 門司鉄道管理局工機部 〇五六
 六

や

矢上氏 〇一三五
 矢上氏の出自 〇一三六
 矢上系図 〇一三八
 矢上孫三郎泰継 〇一四〇
 矢上弥五郎 〇一四一
 矢上真澄 〇一四二
 矢上左衛門二郎 〇一七七
 矢上左衛門五郎 〇一七七
 矢上高純の比志島城攻撃 〇一
 七九
 矢上氏は南朝方 〇一八七
 山田村 〇一二七

山田久興 〇二二九
 山田忠尚 〇二二五
 山田清安 〇四五四
 山背国隼人計帳 〇一〇七
 山の神祭 〇五六四
 山門院木牟礼城 〇一四四
 山本正誼 〇四五〇
 八木玄悦 〇四六三
 薬師堂遺跡 〇六一
 薬丸自頭流 〇三六三
 弥生文化 〇五八
 康友は忠久の小舎童 〇一三一
 屋敷への賦課 〇二三八
 屋敷者と作子 〇二四一
 八代を九州経略の根拠地とす 〇二七五
 役料米 〇三四一
 厄払 〇五五三
 流鏑馬神事の作法 〇五七五
 役所費の内容 〇二二八
 ヤミ市 〇三三三
 油須木村 〇一五三

ゆ

弓矢の將軍 〇二一一
 弓と矢の祝 〇五五五
 有志の脱藩計画 〇三九四
 結納 〇五五二
 湯灌 〇五五四
 ユエーデコン 〇五六二
 郵便貯金 〇五四一
 郵便料金 〇五九五
 郵便 〇六一二・七〇七
 郵便局 〇六三一
 輸入の推移 〇五〇九
 輸出の推移 〇五一二
 優性保護相談所 〇六四四
 有配偶者の割合 〇八〇〇
 有形文化財 〇一〇九三
 有足と無足 〇二四一

よ

四万十層群の山地 〇四
 四号住居址 〇七二
 四橋 〇五〇一
 洋画の伝統 〇一〇六六
 洋楽の伝統と発展 〇一〇七五
 洋舞 〇一〇八四
 洋式砲術の採用 〇三八四
 洋式砲術の研究 〇四六六
 洋学館 〇四八一
 洋書の刊行 〇四八八
 幼稚園の制度 〇八一〇
 幼稚園制度の改革 〇九三二
 幼稚園舎の戦災焼失 〇八七四
 幼稚園令と同施行規則 〇八七
 一
 幼児保育と初等教育との概観 〇八六九
 幼児保育の制度 〇八四三
 用途地域の決定 〇七二九
 用途地域の変更指定 〇七三一
 ヨーロッパ人に知られた鹿児島 〇二八六
 ヨーロッパ人の来朝 〇三〇一
 養蚕 〇四〇四

養護学校の制度 〇九五九
 吉田村 〇一二七
 吉貴 〇三三四
 義久・守護となる 〇二六九
 義久秀吉に見え降伏す 〇二七
 六
 横山正太郎の死 〇六三五
 横井野町の特色 〇四四四
 陽明学 〇四五二
 陽性梅毒 〇三二
 嫁入婚 〇五五二
 謡曲 〇一〇八一
 翼賛壮年団 〇六二
 与党野党の争い 〇二三〇
 用作田 〇一六五
 寄郡の成立 〇一一九

り

領所 〇一二三
 料所 〇二〇三
 琉球の統一と対明貿易 〇二四
 四
 琉球国王使道安 〇二五一
 琉球島津氏の統制権を認む 〇

二五一

琉球の嘉吉附庸 ○二九一

琉球に人員糧食を求む ○二七

六

琉球使節の来鹿 ○二九六

立憲改進黨 ○六〇七

立憲帝政黨 ○六〇七

竜雲寺 ○二五三

竜雲寺の玉洞桂庵を招く ○二五四

竜造寺氏を破る ○二七五

隆盛院 ○五二四

了性寺 ○五二七

旅館 ○三一三・三二三・三三〇
・四八四

旅館ホテル ○三三六

吏員の任命 ○五

隣保班 ○六五

量器衡器・農具類 ○三六二

臨海工業地帯 ○三八四

林野 ○四二三

旅客船 ○五八七

八七

引

れ

靈鷲山弥勒院 ○二二三

列朝制度 ○四五七

練兵場 ○六三五

歴代議長 ○二五〇

歴代副議長 ○二五二

レツド・ページ ○六七六

ろ

六月灯 ○五七〇

六月灯の起源 ○五七一

六支庁管区制 ○六三一

六・三・三・四の学校制度 ○九二七

労働行政 ○六六六

労働力人口及び就業人口 ○七九六

ロシヤ皇太子の来遊 ○八一

わ

若宮神社遺跡 ○四一

若宮神社 ○五一八

若水汲 ○五六二

和田玉林遺跡 ○六一

和議破れ慶長の役起こる ○二八一

和歌の伝統 ○一〇五三

倭寇 ○二九〇

倭好の品 ○二九一

脇田地区土地区画整理事業 ○七三九